自娛小録

七

昭和六年十一月下浣起筆

特別
イ4
1919
436

176701

自嫌小録

昭和六年十一月下浣起筆

○昨年来銃砲術頭を歩いてみると戦時氣分が濃つてゐる。出征軍人の慰問と募金をしてゐるものもあり、出征軍人の妻子の救助金を募つてゐるものがあり、デパートメント、ストアーも現在献納品を集つてゐる。慰問袋に軍歌を奏してゐる。去年国体が列をなしてゐるのを見ると、国旗打振りの旅を振てゐる。方々の社寺で戦勝の祈禱をやつてゐる所もある。日支いまだ国交断絶とまでは行かぬが戦雲の漲つてゐる。満洲の冱寒の指を塞

38- 9222

すの事きこのかある。出征軍に抵抗を云々四囲後の六
ヒである。全等は北京に於ける無関係である譯なのである。
聯盟の態度も決して楽観を許さない。聯盟がこの
為態度の出でようと日本はやるだけのことはやらねばな
らん。憂ふる所は徒に外交と軍部が抵抗することで
ある。兎角軍部は内閣の意の如くならず、抑へんとして
も抑へ難い。今朝の如く外国電報を見ても知
るが、聯盟は日本政府が出征軍を制御する力の
無いのを見て為す術なしとある。これは全く日本の内
情を知らざるもので、軍は強く外交は弱い。或る消
息通の内密語る所に依ると、日本軍は決して受け大
刀ばかりでなく、可なり挑発的で、東支鉄道

東京製

は日本軍が破壊したのだと云ふのである。聯盟の悪化
もかなり北等の情報から来たのかも知れない。
今の軍隊は若い将校が幾人か大将
の軍令が行はれないとか外の何等持つた支那を相手にして正直に一歩強りも
内ごうとしたが、ともかく無謀の挙は国の為め憂へ
られる。ともかく聯盟の霊鶴伴を早く脱して一挙に
支那を屈伏し去ることが、聯盟を環視の間に出征軍
の軌道を逸するやり口は困りものだが恐らく政府の
節度は抑制が出来ないやうだ。聯盟中のあつて
も雑音をつけられるより、早く脱盟を申し、国交
を断絶して戦ふ方が得策であるかと思はれる。北の

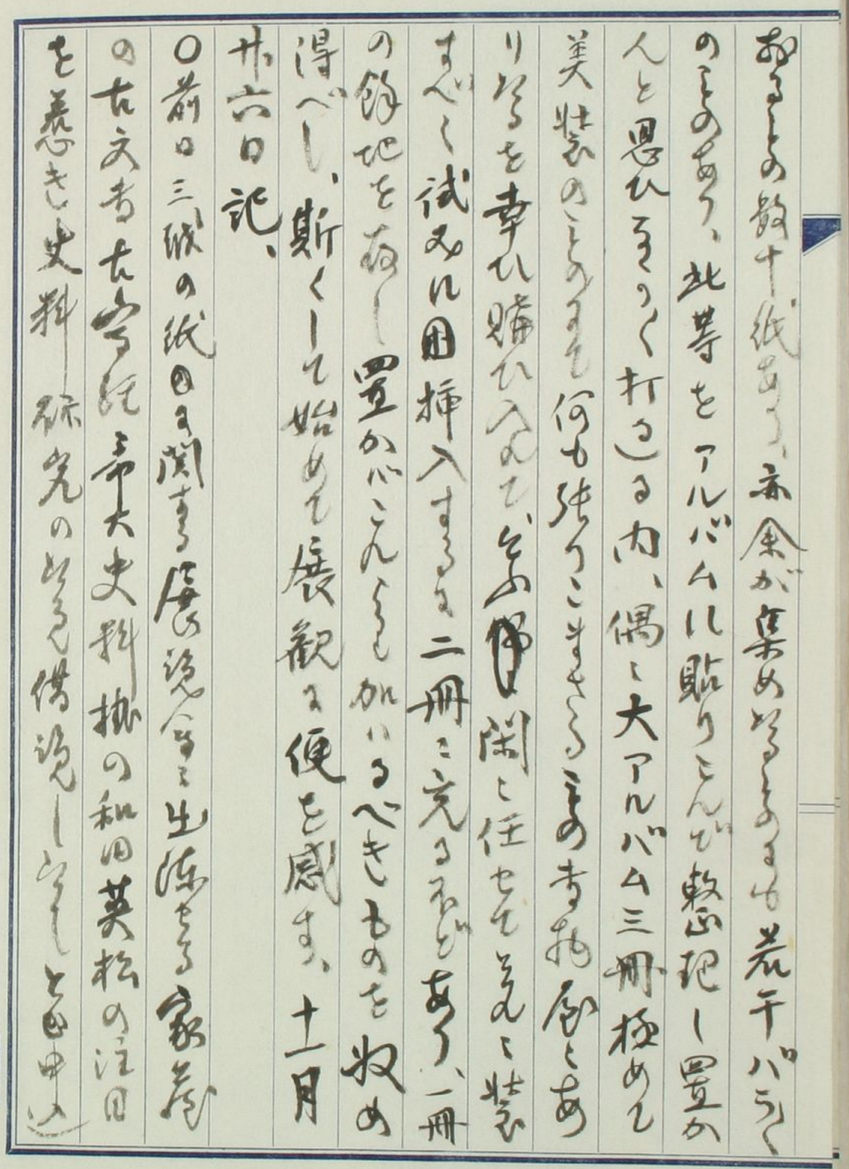
四雄に直面して政府も政党も無力である。現在内閣の動揺中である。聯盟を去ることを表明する微温的の義絶を續けてゐれば、日本はますます不利の立場となるであらう。いつそ真剣の義絶とする方が拳国一致の実を挙げあらう。日本の軍隊の精鋭を示すべきの秋の時である。政府も今直ちに立ち得ないのは、世界大戦の疲癒が念慮されるからである。保し今後数年の後となれば、日本の勢力益々強大となり、荒かずして時を断乎起つて支那の死命を制することである。

○稀書複製会出刊二書の配本を受く、一江都名色絵前年複製せらるるとあれども、完本なるを以て完本を振り初めて完備の複製を得、西の北

東京製

尾西の名ることを後の春錦絵なることも分かるを得たり、本刊年も初めて西暦と知り得たり本書は江戸時代流行の玩具を面白く写せるものなれば現代の考証まもいろいろ引用される事也、委しくは解説の新しく見るべし。二冊とも大変手業の句を収めたる紙書なれど二冊の書名は大石良雄の撰に係るとあり子業五十部の限定版なり東都帯ちとの自由来もあり弥生とさんとあるまでもあるべし。

○亡友高橋義彦集古文書を引き写す中に幅と装潢さんなる巻子となりあるを見て、バラバラとなる



稀書複製會々報

第七期 第十三回

昭和六年十一月

第七期第十三回配布本

二つ竹　全　一冊 廿二丁

江都二色　全　一冊 廿八丁

右配本のうち、落丁や不良本がありましたら、御申越次第御取替します。

複製本解説

二つ竹　一冊

（原本　安田文庫藏）

赤穂義士の中に、俳人として知らるゝ大高源吾については、古くより戯曲にも小説にも取り入れられ、人口に膾炙する事柄頗る多し。而して子葉が撰する所の本書に關しては、建部綾足著の『をり〳〵草』冬の部下に「大高子葉俳人汀砂をつかふ條」と題し、其年十月の始め、子葉が桑岡貞佐に囑して、京山科なる大石内藏之助に、自撰の俳書の題名を請ひ、これを奈良にて彫刻裝幀し、五十部を携へて東歸せることを記せり。又その書名について「此冊子の名は如何にせむと問へば、主碁の一手を止めて、暫時思ひ回らしつゝ、これは二つの竹と名くるなん善かめれと言へば、座中の人々宜なりと答ふ」とあり、こは謠曲の『放下僧』の「こきりこの二つの竹の、世々を重ねて、打ち治まりたる御世かな」を引用せしなり。これに據りて本書が、その頃より珍書なりしことを證すると共に、五十部限定本なりとの噂も、また此所より出たるを知るべし。

編者大高子葉は、名を忠雄といひ、源吾と稱す。播州赤穂城主淺野長矩に仕へ、二十石五人扶持を給せられ、中小姓、膳番元方、金奉行等に歴任して腰物奉行に至る。その父祖は『松平隱岐守殿江御預一件』にある親類書に、

一 父方祖父　秋田城之介樣に罷在候死去仕候年數覺不申候　秋田伊織
一 同祖母　雖娘井死去仕候年數覺不申候
一 母方祖父　淺野内匠家來、死去仕候年數覺不申候　小野寺又八郎
一 同祖母　右同人家來去秋死去仕候　多川九左衞門娘
一 父　右同人家來、二十七年以前死去仕候　大高兵左衞門
一 母　右同斷播州赤穗に罷在候　小野寺又八郎娘
一 弟　右同斷小野寺十内方へ養子に遣す　小野寺幸右衞門
一 叔父　右同斷家來　小野寺十内
一 從弟　右同斷　岡野金右衞門
一 從弟　右同人妹
一 從弟　福原内匠樣に罷在候　大高半五兵衞

とあり。はやく俳諧を嗜み、富森春帆、神崎竹平等と共に水間沾德の門に入り、初め沾葉と號し、後ち子葉と改む。別に湖月堂、凌霜亭と號す。時の俳匠其角嵐雪等と交を訂し、元祿十年七月君侯に扈從して歸國せし時に『丁丑記行』一卷の著あり。同十二年再び江戸に出づ。同十三年版『焦尾琴』に「此かほり降う南や桐の花」「爐開や鼻をならべて雨を聞」の二句を收載せらる。翌十四年三月主家異變の後、故國に復り、四月十九日赤穗開城に際し、母を奉じて京都に上り、山科なる大石内藏之助の許に馳せて、義舉の劃策に參與せり。當時同志の内に、急進漸進の二派を生じ、源吾等が内藏之助の意を體して、東西の連絡に從事し、一味の崩壞を防ぐに奔勞せしこと一方ならざりき。殊に内藏之助は、故侯の實弟大學が閉居を許され、更に舊知再下の沙汰あるべきをも冀望しをれる爲め、その行動の兎角逡巡躊躇せるに憤激する輩もありき。是等錯雜せる事態を融和せんとて、その年十月八日源吾は先輩進藤源四郎と共に東下し、奥田孫太夫、堀部安兵衞、高田郡兵衞等に會ひて、内藏之助の意中を傳ふ。尋いて内藏之助も江戸に來り、先着の原惣右衞門等と萬事打合せをなし、同年十二月二十三日西上、その翌々二十五日源吾もまた原惣右衞門と江戸を發足せり。

源吾が當夏以來病痾を押して奔走せるの狀は、堀部安兵衞が差出せる中村勘助及び潮田又之亟宛の書簡に見ゆ。其文に

一大高氏御病氣故、原氏も存之外に永逗留、彼是間違氣之毒に存候、大高氏事當夏も御煩、且亦此節寒中と申、御病中之御旅行、御容體千萬無御心元、御噂申計御座候、相談も追々決定仕寄候故、同志之衆中何れと申す内、大高氏事別して大切成御身、何とぞ御氣力早御肥立候樣に願存候、彼是之御左右早々被仰聞可被下候

とあり。翌十五年正月京着。次いてその年七月に至り、大學も知行召上けられ、本家淺野氏に引取りの命を受けたり。この爲め同盟の人々の中に倦怠を生じ約を破りて退去するもの續出するに至れり。茲に於て内藏之助は源吾及び貝賀彌左衞門の兩人に命じ、曩に提出せる誓紙の連判を切拔きて、これを京阪播州在住の一味に差戻し、以て同志の意中を探り、更にこれを糾合してその結束を緊密にしたり。同月二十八日圓山重阿彌の別墅に會合し、折から上京中の堀部安兵衞も列席して、復讐を決行する事を議り、その翌日安兵衞は東歸したりき。

是より先き吉良義央は隱居し、吳服橋より本所へ屋敷替せられ、更に羽州米澤に退隱せんなどの噂も聞えたるより、堀部父子等江戸在住の人々より頻りに同志の東下を促し來れり。乃ち八月末より十月に至る間に、三々五々密かに江戸に入り、内藏之助も十月半ばに京都を出で、暫く武州河崎在平間村に住み、十一月中旬日本橋本石町三丁目小山屋方に移る。此時源吾も母を播州赤穗に送り、更に引返して十月十八日同志七人と共に江戸新糀町六丁目吉田忠左衞門宅に入り、その翌日南八丁堀湊町宇野屋十右衞門裏店に轉居し、大阪町人脇屋新兵衞と稱して同志の間を周旋せる内に吉良義央の茶道の相手となりをれる山田宗偏に取入り、財物を以て其の歡心を買ひ、同人より吉良家の動靜を聞く事を得たり。然るに機漸く熟し一擧事を決せんとするも、義央在宅の實否を知る能はず百方苦心の末、宗偏より十一月二十三日の茶會が、十二月六日夜に變更し、更に同月十四日夜に延引せることを聞知し、他方羽倉齋宮等の報道を綜合して、その確實なるを期す。十四日源吾また宗偏の居を訪ひ長坐雜談、同人が吉良邸に赴くことを突留めて辭去せり。

その夜源吾は、豫て圖取にて定めたる部署に從ひ表門口の五番手に當り、吉良邸前に至るや、間十次郎と共に一番懸に乘入り遂に素志を達することを得たり。其の實況は叔父小野寺十内が老妻丹女に贈れる書翰に

源吾は大だちとて、長刀の樣なる大刀を持ち、下に紅の兩めんの小袖きて、上に兩めんのくろき廣袖の小袖をき申候、出立わきていさぎよく見え申候、これも當の敵を打取り申候、わかき者どもぶん〳〵の働らきして、同じく本意をとげ申候事、さて〳〵うれしさ、すもじ有べく候、ともに悦び給ふべし

とあり。「山をぬく力も折れて松の雪」の一句は、その此時の吟詠なりといふ。また『其角與文鱗書翰』は正否區々の論あれども、一讀痛快、壯擧の光景を髣髴せしむる所あり。

翌十五日源吾は、大石主税以下九人と共に松平隱岐守定直に御預となり、直に愛宕下の上邸に送致さる。その翌日火の元惡しき爲めとて更に三田の中屋敷に移され、二番小屋に入る。翌年正月五日、松平侯は中屋敷に於て義士を引見し、下着（桑染兩面）上着（羽二重定紋を付、わた入）足袋（亀相に無之 樣申付之）を賜ふこと皆同じ。その頃「鼻紙で經書く爪も若菜哉」の句あり。翌月四日、幕議の結果切腹を命せられ、辭世「梅で呑む茶屋もあるべし死出の山」と詠じ、宮原久太夫の介錯にて、三十二歳を一期として死せり。法名は及無一劒信士、高輪泉岳寺の後山に葬る。

本書は、池西言水の序文に「元祿十伍仲夏」とあれば、源吾が京都に在りて、東奔西走寧日なき時に成れるものなり。原本竪七寸三分半、横五寸二分にて、柱記に「一つ」とあり。序文一葉、本文二十一葉にて終る。

その序文及び子葉の卷頭言を見るに、昨春（元祿十四年）來、在京せる了我の東歸を餞せるの意を表せり。了我とは『をり〳〵草』にみえたる汀砂、卽ち桑岡貞佐の前名にて、當時子葉と共に京都に在りしを知る。此人其角門にして、享保十九年九月十二日、年六十三にて歿したれば、子葉より若きこと一歳なり。卷中言水、東潮、立吟、漸之、放水其他の句に次いで、子葉は「初鰹江戸のからしは四季の汗」と吟じをれり。その後半は子葉の訣別句集にして「とかくして長月末、京よりあづまに赴かんとする時人々名殘を河東に會す、逢阪を切つてはなすなさねかつら　子葉」とあり。これには東潮の「馬指や火桶に戻る軒の聲　東潮」を始め、鬼貫、東流、人子、鞭石等の句を列記せり。追加として「古狸引導　里石醉書」「古狸追悼　子葉戲言」の二編を添へ、後者には「露の世や六十棒のめつたうち」の句を附したり。次に怪石の跋文「沾德が若竹了我かことし竹ともすれの聲ついに龍兒をはらんて宮徽をたすくるもの也けふりをとゝむへし雪をまつへし其世わかきは子葉なりおもふにこの人竹を知れりまた誹諧の白劉」とあり。奥附に「京寺町二條上ル町、井筒屋庄兵衞板」と記せり。同家は蕉門俳書の出版元として人の知る所なり。

子葉は才智辨舌人に勝れし由諸書に見ゆ、二代目市川團十郎の日記『老の樂抄』に、「子葉はいくびにていも顔なり、貞佐物語」とあれば、あまりに風采の揚りし人とも思はれねど、所謂如才なき人物にてありしならん。急進派の先鋒竹林唯七が上京して、源吾等に會し、逡巡事を擧げざるを憤り、腰ぬけ武士と面罵し、席を蹴つて退去せんとせし時、源吾はその袖をひかえ、諄々として事態の成行を說き、遂に膝を交えて謀議を進めし如き、そゞろに其人柄を想はしむ。また神崎與五郎東下りの馬方詫證文も、實は源吾の事なりとも傳へらる。その事實は疑はしきも其角兩國橋の出會、本所蕎麥屋の行燈に俳句を記せし逸話等、いかにも此人に相應しき事のみなり。『丁丑記行』に、大磯に三千風を訪ひて、不在なりしに一句を殘置けること見ゆ。本書にも言水を始め、櫻塚に西吟、伊丹に鬼貫を訪ひて、吟什を應酬し、思ひを風雅に遣りて、義擧のそれを忘れをるものゝ如し。以て世間を韜晦せんとするものに非ざるも、その行動が有意無意に反間苦肉の策となりし事、祇園伏見等に耽溺せるウキ大盡のみにあらざりしなり。

卷中の「漸之」は實弟小野寺幸右衞門「放水」は從弟岡野金右衞門にて、共に貞佐門人なり。「春帆」は富森助右衞門「竹平」は神崎與五郎にて、皆義擧同盟の人々なり。況んや緣戚に小野寺十内夫妻の如きものあり、子葉に文學的素質ある亦故なきに非ず。最後に『五元集』の「故赤穗城主淺野小府豎長矩舊臣、大石內藏之助等四十六人、同志異體、報亡君之讐、今玆二月四日　官裁下令一時伏刄齊屍　万世のさえづり、黃舌をひるがへし、肺肝をつらぬく　うぐひすに此芥子酢はなみだ哉　富森春帆、大高子葉、神崎竹平これらが名は焦尾琴にも殘り聞えける也」を追記して此稿を結ぶ。

原本題簽を逸す、乃ち剝離の痕によりてその幅員を定め、例により三村竹清氏の筆を煩はせり。

江都（えどに）二色（しき）　一冊

（原本　米山堂藏）

本會第三期複製本『江都二色』の解說にて述べたる如く、本書は玩具を畫きて其上に狂歌を題賛せしものなり。本會は初期以來其複製を企て、原本搜索に力を盡し、遂に東京淺草仲見世武藏屋主人萬場米吉氏の所藏本を借り得て彫版し、校合成り、いよ〳〵刷りに取懸りし際、癸亥の大震火災に遭遇せしかば、萬場氏の原本も本會の板木も烏有に歸したり。幸ひに校合刷だけ

は殘存せしを以て再び剞劂に附し、之を大災の翌年一月の配附本となしたりき。特に記念すべき刊行物なり。

武藏屋は十五丁より始まりて二十七丁に終り、最終に筆寫の御來迎の圖あり。そこに二三の疑問なき能はざりき。

然るに今般圖らずも首尾の完全なる良書を得たれば、後半の重複を厭はず其全部を複製して發行することゝせり。而して前回の疑問は之によりて解決することを得たること快心に堪へざる所なり。乃ち新に複製したる完本と前回とを比較對照して左に解說を試みんとす。

まづ見返しの、圓圈内の人物畫は武藏屋本になき所なり、但し次ぎの序文の蜀山人の作たること及びそれが『四方の留粕』中にあることなどは、前回にいひたる通りなるが、本書の序文には「わらはゞの玩び物を畫きて」云々の下に「蟋川」「梅三子」の二印章ありて、『四方の留粕』には振鼓の中に老萊子の三字ある圖を畫きあり。此相違に注意すべし。また武藏屋本には年號を刪去せるに、本書には「明和十」と明記せり。この點は『四方の留粕』に同じ。更に訝かしきは、武藏屋本に「一年睦月の比」云々とあるに、本書には「明和十年陸月の比」とあり。かく相違せるは何故にや。或人はいふ、板木の一部亡失せし爲め、殘餘のものゝみを利用して、出版せるものが武藏屋本ならん、その際序文の陸字をも改め、又明和の年號をも削りしにあらずやと。一說として揭げおく。

完本の丁數は二十八葉（內序文一葉）にして、玩具の品類も其數一百に近く、實に江戸時代の玩具畫としては唯一無二のものと謂ふべし。山東京傳、柳亭種彥、喜多村筠庭、石塚豐芥子等が屢々本書を引用して、明和安永頃の事物考究の栞となせしや宜なり。

本書所載の玩具中、鶯笛は『犬子集』にも見えたれば、既に寬永頃よりありしを知る。芋虫は紙にて作りその內に土を丸めて入れ、割りたる竹の上を轉ばすものにて、後出の俵の原型なり。大小と兜巾は『骨董集』にその考證見え、五月五日に男兒がこれを着け、山伏の體にて遊びしなり。既刊複製本『月次の遊』にもその狀を畫けり、併せ看らるべし。御來迎は、武藏屋本の最終に附しありし圖にて、その考證は『還魂紙料』に詳かなり。土佐掾正勝の『博多露左衞門色傳授』にも「じたい御來迎は、大坂のしだしでござる」とあれば、寬文延寶の頃に行はれたるものなり。飴の鳥は『守貞漫稿』に「今世も飴の鳥と云て飴細工の惣名とす」とある是なり。今日も街頭日當りのよき所にて鬻げるを見る。米搗き猿は『續五元集』『篋紋輪』等の句と、本書を引て考證せるもの『嬉遊笑覽』にあり。振つゞみは、我邦における古玩具の一なり。元來唐制を摸せしものにて、『榮花物語』にも、その名目あり、今もなほその形殘れり。與次郎兵衞は『屠龍工隨筆』に精しく考證せり。此人形を指の先にて廻すさまを畫けるもの寶永享保頃の草子にもみゆ。江戸にては彌次郎兵衞といへり、そは近世の稱なる歟。頰かぶりはその正しき名を知らず。『守貞漫稿』には、近藤清春畫の五丁物にて、江戸の小賈を集めたるもの一葉を載せて、これを考證す。「人面を紙に印し、周りを截除き、細管の頭に貼し之、又削竹を管中に通し、是を上下するに目を動かし舌出入するものなり、號けてべつかこうと云」とあり。近年まで舌出し三番叟に形どりしものあるを見たり。豆鐵砲は『嬉遊笑覽』に本書を引いて「今あるとは作り異なり」とあれば、文政頃既にその製法の相異なれるなるべし。松毬人形は同書に『日次紀事』の、松かさにて雉子の形を作りしこと、及び本書の狂歌を揭げ、これ雉の鳥より出たる作り物とみゆと記せり。千木箱は江戸芝神明祭の賣物にして、その考證は『骨董集』其他の書に詳かなり。今も尙ほ九月十一日より二十日に至る同祭に、目かけ生姜と共にその俵を存せり。あやふや人形は氣儘頭巾を着たる風俗人形なり。このさま近年冬季に風邪豫防のために用ふマスクにも似ていと可笑し。『嬉遊笑覽』には本書の狂歌を引いて「あやふやは危ぶむにて疑ふ意となれり」と記しをれり。お伽婢子、紙雛共に、周知の事なれば略す。野呂間人形は、『聲曲類纂』『嬉遊笑覽』『近代世事談』『竹豊故事』『於路加於比』等に出でたり。要するに、のろまは鈍なるを表し、のろし、ぬるしなどいふ意にて、愚かしき表情の人形の名に呼びしこと、思はる。野呂間狂言の正本世に傳ふるもの尠なし、その二種『未刊隨筆百種』に收めたり、併せ看られなば興味一層深かるべし。張子の虎は『雍州府志』にも、木にて摸型を作り、紙にて張貫く記事あれど、そのかみ建札門院が平家一門の文殼を以て、自らの像を作られし由傳へらる、その事實は知るねども其物古くよりありしを知る。『好色一代男』にもその名見ゆ。今日も松茸を背負ふお龜女の首の動くは、皆この虎より思ひ附きしものなるべし。大坂神農祭のもの、その有名なるものなり。地口

は殘存せしを以て再び剞劂に附し、之を大災の翌年一月の配附本となしたりき。特に記念すべき刊行物なり。武藏屋は十五丁より始まりて二十七丁に終り、最終十年陸月の比」とあり。かく相違せるは何故にや。或人はいふ、板木の一部亡失せし爲め、殘餘のものゝみを利用して、出版せるもの」ごとし、その際

行燈は本會第四期複製本『鐵炮洲燈籠略圖』の解說を參照すべし。『嬉遊笑覽』に「予が父の物語に、一とせ小田原町の稻荷祭に、俄に小雨ふりければ、駿河町越後屋番傘を借てさしたりとぞ」云々とあり。破魔弓は『麓の花』に諸書を引用して考證しあれば、こゝには省略す。土鈴と壺々は共に古きものと見ゆ。『大筑波集』『毛吹草』等の句にてその形も想像され、その產地も山城伏見にて、專ら初午祭の賣物にせるさま『天和長久四季遊』に見えたり、但し壺々は文化初年に絕えたる如し。土鈴のみは現に濃州美惠寺その他に殘れり。首人形は『好色一代女』の「衣類と首は各別に違ひ合點首の如し」を考證して、合點首は今もある首ばかりの人形なるべしと『嬉遊笑覽』に見ゆ。今も佐渡、阿波、陸中、陸奥等に土製の首人形を產す。山猫は本書の題歌を引用して『岡場遊廓考』に「俳諧師の山猫と赤城の山猫を兼てよまれたり」とあり。かゝる玩具の山猫てふ名稱にて賣出したるより、牛込赤城社境內の私娼にかけて詠せしなるべし。俳諧師の山猫云々は不明なり。山猫の名稱に就いては同書に詳かなり。要するに兩國の金猫銀猫に對して山の手の猫といへるなり。相撲人形は、紙を剪拔きて、人字の如くにこれを疊の上におき、二人相對して息をふきかけ、之を倒し戲れありしこと見えたり。然るに板を以て作れる事本書によりて知らると、例の『嬉遊笑覽』にあり。ぶり〳〵、毬杖は兩品共に『骨董集』その他に詳記されたり。ちい〳〵車の福の神は、武藏屋本の解說に見ゆ。幟猿と風車は『嬉遊笑覽』に、本書を引きて「幟さるはもと五月幟の下に付たる括り猿なり、もてあそびのは其體異なり（中略）短冊ほどの小幡の風に吹るれば、猿竿の上にのぼるなり」とあり。風車は『帝京景物略』にも其名見え、和漢その名を同うせり。『尤の草紙』『雍州府志』『松の落葉』などにも見えて、古昔よりの玩具の一なり。麥藁蛇と唐團扇は共に六月朔日江戸駒込富士祭の賣物なり。今はその形を異にして各所の富士祭にて鬻ぐ。唐團扇は既に早く絕えたり。唐獨樂と餅花、前者は『長崎歲事記』に、又の名象獨樂といへる由を記せり。昔は象の聲を知る者少なかりし故、その名の適否を知らざりき。東京の唐ごまを、京阪にて竹ごま、熊本にて雷ごま、宮崎にてブン〳〵ごま、又は竹車、大分にて千太郎ごま、又は八丁ごまといふ由、その音響の八丁の遠きに及ぶの意味ならん。後者は江戸南部目黑不動境內にての賣物なり。『金々先生榮花夢』にてお馴染のもの、その形兩書相同じ。目黑詣りと餅花、それに品川を取合せて川柳子の穿ちたるもの、能く人の知る所なり。餅花のみは今絕えたり。大山細工挽物は、相州大山邊にて作り出せるものにや、土產物として江戸に行はれしなるべし。十團子と俵、下げ物は、狂歌に宇津の山云々とあれば、東海道宇津山の名物をいひしなるべし。次の俵は前出の芋虫の條にいへる如く、その原據を知るべきなり。下げ物は『傾城色三味線』に「印傳の橫ひだ（巾着）金岡時代の筆捨松の蒔繪の平印籠、袋打の長緒、あまかはの二ツ玉、廿六夜の瓢簞根付もさらにおかしく」など見えたり。右を形取りし具玩にて、祭禮緣日などに、角細工の犬張子その他の腰下げ物を賣る店今も見る所なり。猩々小僧は下の臺にさしたる笛を吹けば、上の人形の廻る仕掛けにしたる玩具なるべし。『江戸名物鑑』雪之卷の「獨黍や出水の中のみだれかみ」の句を題せる畫面と合考すべし。羽子板は『骨董集』には『下學集』『壒囊鈔』『世諺問答』等を引證して委曲に說けり。袖凧、鳶凧、雷凧は『奴師勞之』に「やつこだこは鳶だこの形をうつして是を尻尾にしたるもをかし、是は安永の始より出來たり」とあり。本書に見ゆる袖凧はこの奴凧の前驅として現はれたるもの歟。雷凧は繪樣より名付けしものなるべし。手車とかくれ屏風は『近世畸人傳』に、此玩具を賣れる手車の翁の記事あり、大阪にもありき。いづれも享保頃のものなり。その記す所本書のそれと同じ。かくれ屏風は後世のからくり屏風の謂にして、京阪と江戸とその作り方異なる由『守貞漫稿』に見ゆ。豆德利と板琴、前者はたゞその小なるを賞づるもの、後者は今尙ほ緣日の賣品に見受くる所なり。かゝる粗製の玩具は、流行癈絕の圈外に在りて、いつまでもその形を殘し居れり。起上り小法師、獨樂は、漢土に所謂不倒翁にて、我邦にても狂言又は古俳書にその名見ゆれば、既に行はれゐたる時代を知るべし。何時の程より達磨になりしかは明かならず。獨樂は、『和名抄』の「古未都玖利有孔者也」とあるを古しとす。江戸時代に入りて獨樂の曲藝を以て一家をなせしものある事、既に知悉せらるゝ如し。伏見人形は、その產地に因みて伏見常盤を圖せり。その形狀もさま〳〵あり。殊に饅頭喰の土偶と、工人に鴉幸右衞門あるを以て知らる。浮人形は漢土の浮鳥といへるもの此類なるべし。『嬉遊笑覽』にも「木の葉の舟に山椒の實にて人形作り棹とらせたるを、鉢の水に浮めたるを讀人不知、木の葉ふね朝くらきより

は殘存せしを以て再び剞劂に附し、之を大災の翌年一月の配附本となしたりき。特に記念すべき刊行物なり。

武藏屋は十五丁より始まりて二十七丁に終り、最終十年陸月の比」とあり。かく相違せるは何故にや。或人はいふ、板木の一部亡失せし爲め、殘餘のものゝみを利用して、出版せるものが武藏屋によらし、その際

漕出し船頭どのはつかれ山椒」の記事見えたれば、是等より思付きて、本書の如きものを創製せしならん。鹿島の幣束は、題歌の「じゆんゞ〳〵」も玩具の名なるべし。鹿島踊の名は元祿以前より行はれたりしも、後世のものとはその趣きを異にせり。『人倫訓蒙圖彙』日本永代藏』の書文と『守貞漫稿』の記事を併看せば首肯せらるべし。竹馬は古へは枝葉ある生竹を弄べる事『骨董集』に見えたり。『守貞漫稿』に本書と同一の圖を掲げ、「江戸制は木也、竹馬ト云ズ春駒ト云」とあり、これ近世の謂にして、本書發刊の頃は上方と同じく竹馬といひし事を證するに足る。現今東京にて竹馬と稱するものは、七八尺の竿竹に横木をくゝりつけ、これを足がゝりとして乘り上げ、一歩々々行進するものなり。

以上の外に未考のものあり。考證を要せざるもあり。なほ右の玩具中、本書編纂の當時、卽ち明和の頃に既に廢絕せるもの多少ありしが如し。此事に就いては、『還魂紙料』に本書の御來迎の圖を掲げ「此さうしは江戸にてもてはやしゝ手遊びを、古き新しきを分たず、それとかれと二色づゝとりあつめて、江都二色と題り、畫は重政、賛は弄籟子と隱し名せる老人なり。かの翁が畫人に傳へてかゝせたるもありし歟、今は目馴れざる物多し。又或人のいふ、明和七年再御來迎といふ物行はれしことあり。其刻みは佛像をばつくらず、赤き紙にて日の出のかたちを作り、鳥を畫きし物なりとぞ、是富士山の行者が日の出を御來迎といふにもとづきての製にてあらん。この江戸にしきは古きによりて畫けるなるべし」と記し。また『嬉遊笑覽』にも「江戸二色明和の末に刻したる草子なれども、その圖は古きによれり」云々とあり。頭巾篠懸を考證せる條には「此冊子の翫具これらの物見ゆれば元祿頃の畫と知らる」などあるにてもこれを知るべし。

編者弄籟子に就いては、東京玉川靜嘉堂文庫所藏、笠亭仙果自筆の『よしなし言』第五卷(天保五年)の、柳亭翁の直話を書留めし中に、「江戸にしきの作者弄籟子は白鯉館卯雲也」と記され、また卯雲の家集『今日歌集』の跋文に「壽梓先無燕都錦之彫石行世無之」云々とありて、安永二年本書開版以後はじめての刊行なる旨を述べをれり。武藏屋本複製の折は、この編者も畫家も分明せざりしが、此度は曩きに疑問なりし畫家も北尾重政なる事明かとなり、且つ端なくも編者も確められ、完全なる本書の再現出といひ、彼れ此れ思ひ合せて悅びを禁ずる能はず。

白鯉館卯雲は名を朝濤(とな)といひ、本姓木室氏、通稱は初め庄七郎、また庄左衞門、後に七左衞門と改む。元文二年八月十三日父七左衞門勝久の跡を繼ぎて御廣敷添番となり、後ち御徒目付に轉じたり。寶曆三年相州鎌倉鶴ヶ岡八幡宮其外堂社修覆の爲め同地に在り、同六年正月二十五日斑を進められて小普請方となり、廩米百俵月俸四口を賜ふ。明和元年七月十九日曩に武州河越仙波御宮及び三芳野天滿宮修理の事に從ひ、その勞を以て黃金二枚を下賜せらる。同年京師において准石別殿營作の役を勤めし廉にて、禁中よりも公卿寄合書八景和歌の色紙と束帛若干を賜はり、その年十一月二日江戸に於ても時服二領黃金三枚を與へらる。尙數年の勤勞を思召され別に黃金一枚を賜ふ。かの『みた京物語』はこの在京當時の所作なるべし。同五年七月二十九日御廣敷番頭に徒る、例の「色黑く頭の赤きわれなれば番の頭になれそふなもの」の狂歌が讖をなせしこと『奴師勞之』に見えにり。同九年に笑話『鹿子餅』の著あり。安永八年二月五日職を辭して小普請に入り、天明三年五月十日年七十にして歿す。『鼠璞十種』所收の『寄異珍事錄』の解題には、麻布光林寺に葬るを近年狩野映庵氏が『寛政重修諸家譜』の麻布祥雲寺に葬るとあるを基礎として、同寺及び塔中の諸寺院を一々に搜査し、遂に同塔頭の靈泉院の過去帳に、卯雲の法號英照軒雄峰義哲居士並にその父祖と子孫の法名を發見するを得たり。引續き同寺の墓域を探求して僅に其一族の墓石三基を得たるのみにて、其他は全く不明となりをれり。是恐らくは先年同寺墓域の一部が道路擴張に收用せられ、且つ木室の家も無緣となり居りし爲めなるべし。右の顚末は狩野氏が『集古』辛未(昭和六年)第二號に掲載されたる一篇に據りて、從來卯雲の墓蹟も諸書の記事區々たりしに、同氏精査の結果狂歌史の欽漏を補足するを得たり。

卯雲は正德四年番町御厩谷に生れ、その後湯島天神下肴店横町に移れり。明和二年には未だ御厩谷に在りし事同年の武鑑に見ゆれば、その移居は同年末か翌春なるべし。然らば移居後間もなく三月十二日溝口家よりの出火にて類燒し「下谷から山下かけて火事なれば御覽の如くけころりとやけ」の狂歌を詠ぜし歟。同九年(安永元年)目黑行人阪の大火に再び池魚の災に遭ひ「朋友訪ひ來つて又如先年狂歌ありやときく、予白眼

は殘存せしを以て再び剞劂に附し、之を大災の翌年一月の配附本となしたりき。特に記念すべき刊行物なり。

にして答ふは、先キのとし狂歌せしは少しき火中なり、このたびは明暦の時にもおさ〳〵おとるましき大火なれは天變とも云ひつべし、それに狂歌なゞせは天をも恐れさるに似たり、よて狂歌なし、されと臆してせさるにはあらす、たゞつゝしむのみなり、臆せさるしるし見せん、と藏の戸をひらく其扉にかくなん、質物一切被請不申候云々とその家集『今日歌集』にあり。若くして俳諧を初代一漁に學び、二鐘亭栗子また半山と號す、後白鯉館卯雲と改む。當時俳人としても同好の間に推重せられし事、その著『奇異珍事錄』等に見ゆ。先般本會にて複製刊行せる『江戸名物鑑』上卷に、津打治兵衞に題賛せる「蕣や最う顏見世の計」の句ある外、當時の俳書に散見すを得。その公用を帶びて鎌倉河越に在るや、盛名を聞いて俳諧の添削を乞ふもの頗る多かりしといふ。また狂歌師としても早くより一家を成し、『今日歌集』の凡例に

一狂歌とて笑を求めん事をのみ思ひ、地口多きはいやし、それもたま〳〵興あるはよし、意だに狂したらんはきのみ句つゞきの頓作は不好となり、よりて此集一首の表には狂詞少しきもあり、これ其意を專らとすればなり

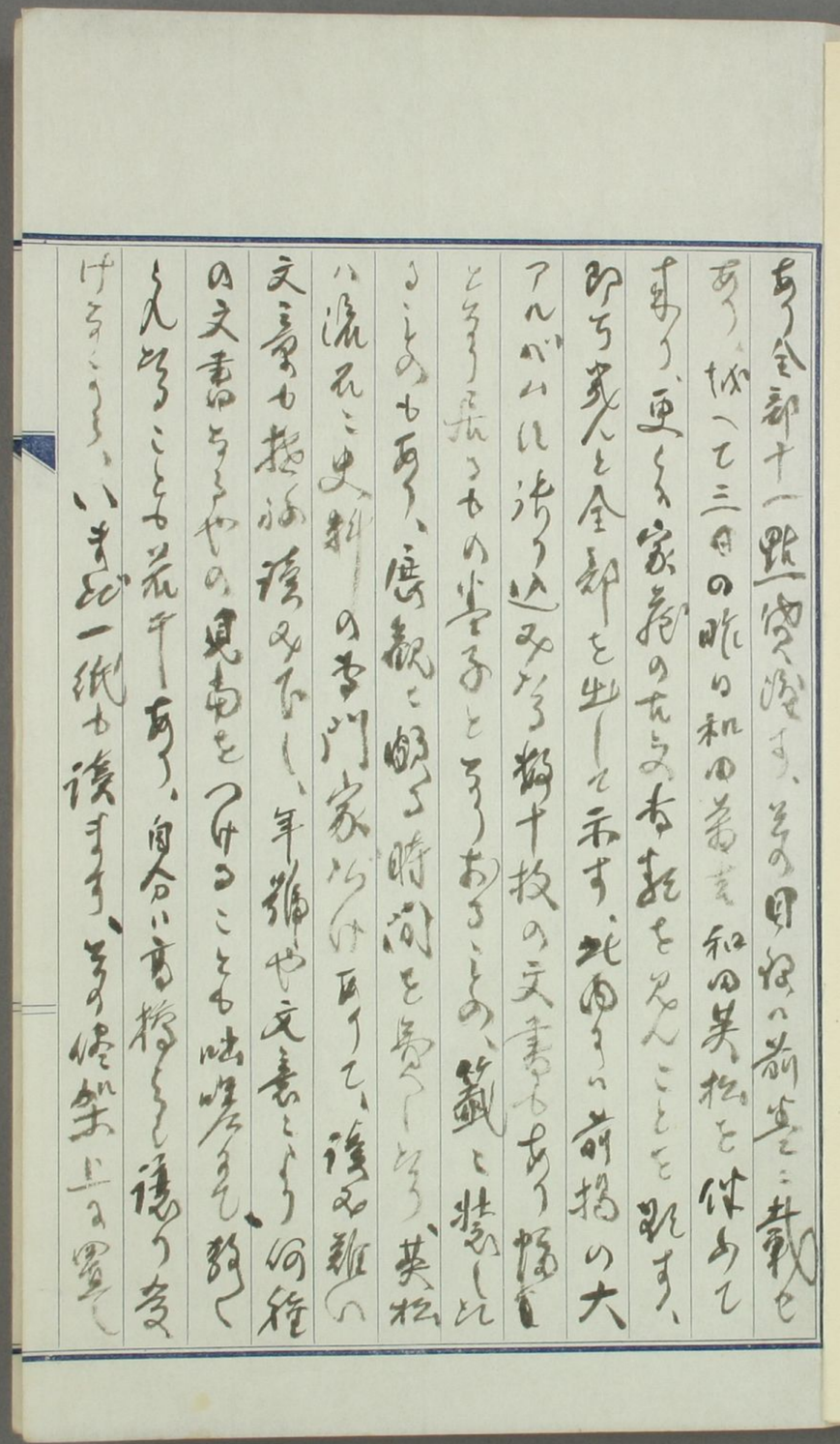
といひ、更に

狂歌の狂の字今花洛には興するを專らとなせばとて六義の興の字なと用ひ、浪花には本歌と狂歌は秤目のくるひのことくわづかのたがひを取れりと狂の字を用るよし、東都に其さたなし、たゞ雪月花にくるふの狂の字を用ゆ取りあへす祝し、取りあへす事をのぶるなれば、今日歌といはんをしかるべしや

とあり。以てその見識の一端を見るべし。その人柄に就いては『奴師勞之』の狐憑きの狂歌に「落ちぬやらさたなし」といへるを、蜀山人が「此古注尤妙なり」と稱譽せるにても知らる。

加之、蜀山人とは年齢の差相半ばする程なれども、その鬼才に敬服しゐたるもゝの如く、その家集に「寢惚先生の許より不沙汰の云譯とて」と前書して「一寸のひまなきゆへにさしつまりつゐごぶさたとなりにける哉、「かへし、此方も一寸のひまなきゆゑにつまるところは不沙汰五分〳〵」といへるあり。蜀山人もまた卯雲の人物に傾倒しゐたるにや、『江戸花海老』に「下谷に名高き卯雲先生と尊敬せり。『今日歌集』跋文の「例翁俳術奇也妙也名言名句不レ可二枚擧一」の例翁の二字は、その本章の冒頭にある「我にいつものおやちの名あり」と新春試筆の題書にあるを漢譯せるものにて、歌場俳席に出てゝ長老振りを發揮せし狀想察するに足る。其家集の書肆室町三丁目須原屋市兵衞より發行せるは、本書の刊行より四年後の安永四年なれど、天明調の狂歌書としては初期に屬するものなり。次て天明元年に『狂歌若葉集』『萬載狂歌集』同三年に『德和歌後万載集』等出版せられ、遂に天明の盛時を見るに至りしなり。

故に本書題賛の狂歌は、物名を讀込みし爲め、所謂天明振りの氣風に乏しと雖も、間々時事の諷刺をも含み、且つその繪畫は古玩具を忠實に描出せるなれば、やがては參考資料として重要のものとなりぬべきなり。



此、系図（系図）の様を得て誰人の書やらさらしあるのみ足利尊氏や義詮等の生涯の事蹟を記してあることや、細氏等の書状が多分含まれる事や、川崎南の書状を始め係接の書状や西園寺公衡の書簡の中に南朝の来信の事からしこと、鎌倉時代の文書のあまり多きことを驚くべし等、史料掛に於て発見せるものもかなりあるなれども全部の傳説を統ぶれば不の字の雷あるを免れざることを恐れ等。史料掛に於ても如何なる研究を施せる後、その結果を学かに、更に得る所あらん

十一月廿七日

口前掲事大史料に使附の目録左の如し

複原製

古文書張込帳　大アル八冊ニ綴

東大寺八幡文書　巻入一巻

南都文書　巻入一巻

（朱）「（墨）」ニ綴シ有ル文書　二種

東大寺関係文書　天喜四年十月等　巻入一巻

紀南田辺城中書簡　巻入一巻

御つとめ衆御費の事　巻入一巻

東寺関係古文状十九通　巻入一巻

西園寺公衡公簡息三枚継　巻入一巻

以上十二點

掛幅貼交ぜ張るもの　并ニ巻子共

千、昨夜示シタルもの　北外十點　計り

あるいは若干人は他日の為めに保留す、

○露国蒸汽船最終の巻　酉本紫雲読中より乃ち

リルウゼンシュテルン日本紀行二冊文学士羽仁五郎

の譯注に係る、えハ露西亞の使節　と乗せて

露国が東洋通商の為めの初めての踏出し

なりし、北船の来国を見たるハ一八〇二年八月七日なり

わう享和二年なり、露国を去りしハ翌年

一月なり、北の指揮官リルウゼンシュテルンハ海軍士官

にして経験多き人なり、現在に至る迄

本書ハ北等の記事に富み、他の日本の外人紀行と同じ

く、之を不朽、特に市井の研究者に資する所の多

き也　北船ハ露領カムチャツカを経て去る

榛原製

本書ハ著者のように露国に滞在せず、其の私案深情なる

初シーボルトを信じて私邦を特来らず、当時作左衛

等ハ北方を浮んが為めに交換的に日本の地図数をシー

ボルトに與へんことを、シーボルトが帰国に臨み船の出

遊の為め発見し、当時ハ之れが為めに刑を受け

牢死せし悲境の後図を有するハ此書なり

余ハ未だ北の香の上巻の「ゆハら」を読ざるを

北紀行の他の外人の紀行と異なるハ、我邦を

けなげに扱ハず、彼等が此書を不平なりしこと

なり、去る明治二十六年頃の或人と船中に異談さる

なることき狀態なりしとて さんくの苦情を唱らん
のみ、市内の幕吏が一概に恐怖狂乱に駆られて
し時を思へば、無理なるも、殊に使節
を乘せる一般の人に對しては、驚きの冷笑と苦情を
唱へられも無理なるまじ、市内日本に来りしし和
蘭人等は幕吏の意を迎へくるこんの日を迎へ
候なりしに引換へ此の指揮官いの儀等なりしの
の蘭人の卑屈の態度を見て冷罵を浴びせ此
ることど先角情慾の氣が業腹と逆つてゐるを
こと淺人び無味を覚へくる
十一月朱夏記
折角海来の露國使節を待ち合せあることと
幕府決し其高く来つれ多くの賜物を受けさる

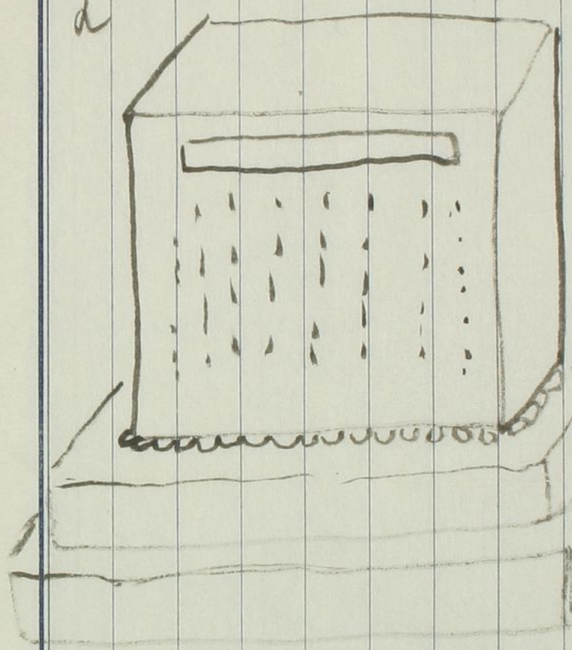
複原制

ことなくなりぬ、其の命けなりし理由いえんを受くまとめ
（これは國際上迎）礼を為さざるを得ないから日本の領國
改革を執りたるなり（迎）礼は使節を國外に出す
ことと未聞なりと。而して接拶する（迎）礼流儀さえ
露使の即ち古時に入りて（迎）礼行くこ
とをなる（以て帰途）と記すことしうりの但し北海の
露艦なる（原）漂流人を載せ北海を本國へ（迎）
礼来と礼の意味とをなくの糧食其他薪水
べを無償で支給し、尚ほ今後露領と日本のこの深
着することあるべし、和蘭なる引渡さんとなりを中止人とな
一行は矢張り（和蘭）なれば、船の乘組員い窮屈な
脱し得るのみなるも、古人此と書かれてゐる。どの外人の記

行き上四に於く金）中の記かのるからこんるん金ふちへこ
の北の紀りの一特徴ひとある。日本の風俗習慣こ八殆り
多く著を執りて最ちるへ、その代りる地理的研究の
充分著を期し、長崎港の歴史ある一章を要しおり、古昔の港を評して世界を稱んする良港とする
ある。尚ほ新る良港ゝ新しこんまで商を来る外人が北の
港を研究することが出こと為めに性得あり、ひさく山脈
を渡ち長ちゝと云て居る。
一行が内金）の人慈人ゝ敬ハ日本制鮮の河を渡る
清新海峡を渡んとするのでこんが指揮者の熱心の
賞ひもあつた。必竟北の人敬ハこんまも学術的に研
究さんとするのでこれのとかい著
を果さんとし北のとかい著

府いさんを考古学的に研究し、地理的に知らすこと
を忘れず）河等を北の航路の危険を示せしが左
じうこうれ。今ようて考へること、北の航路を北の一
行が往々の研究を通じ見を書き残しれの日本
の為めに世界の為めも大なる貢献であるとせ
ねばならぬ。此研究に熱心なる北の指揮者の
紀行は実に測量者の記事を以て満されてゐる。
北紀の大なる優位の生こよるのである。
の此の報告は主を古山の墓地、向け自動車と紀
七紀。多次男爵を嫁しる張し紀二世の五年目の命の高
るの、農墓しては人の世界は生花を墓前と捧げ
紀の北の古山墓地内び注目し紀一基の墓があるこれ

某工学博士の墓碑、其の体制が甚だ新奇なるに入りたり。来年大隈元老の十年祀会に一碑を墓域に建んとす、其の体制を参考にせんとす。自分にこんこを極るきこゆと思ふなり。大体左図のごとくなる、不出こがげ墓石と墓石の間を彫刻にて埋めつくしたるものなり、上部に墓碑文が横書にて彫りこまれ



榛原製

る本磨きをのけたるもの、上部に墓碑文が横書にて彫りこまれ

る再拝！我が国を引かるる元ひもろ。

古山を去つて終に絶望に出づ、ろ絶世術頭に宮日のあの満蒙の墓地に古征の日胞を葬むんと生ずる墓を建てつつある少年少女を刺ずるに見れば、此日初めて見たるなる白布に埋くしたる古墓が紅色の紙で行(きょうせい)を引き始めて白布に白布を一針二針縫はれたるものなるのを見た。日清の女児は縫ひたるもの、何人の為めにするとは知らず出征軍人に送るものなるとも知れぬ。此の縫つた紙を切りぬきて、其を可愛く着けて貰はば嬉しかるべしと云ふて、西洋式のマジナヒもあるか、日本式の守かぬ、ことばもあるが、何れにしても日胞他時の為霊ひもろ、ことば言あまもろ人十月卅日記

の楠瀬日年は文政文政に流行りだした一二の土産を始め、一八楽物と称する玩具を製造し影絵人形男女二點五、紙の人形を切り、五彩の色をつけ身体の各所に針金を附し手足を動かし得るやうにしてみる。未だ実地に試みさんとして日本の影絵を研究し能く優越なりと云ふべきも左あらんと思ふ。この人形は顔面の切り込人にスカシがあり頭髪の装飾にも又カシがあり、衣裳にもスカシがあるから、日本のやうに星ろき影が映するのみではあるまい。自分の玩具棚にまだ一つ二つ外国のものがあるから取敢ず第一のこととして。全体北の影絵は華美に流るる為本格にあらずして、えい模様び紙を何かに

複原製

河の如きニス板のものが金つてある。尚他と一冊の朝鮮本を入れたれど半紙本の史略零本にあるこんへ一種の流行本にあり日つて、近分植家の粗略のもの、こんらも如稚のものを見ることもあるが、これが陶流家であることといふうこと。楠瀬の語るのは大義名分に勝つた他の一冊が印刷してあるとのへ。

楠瀬と次次支那の種々の物の味をもつて所を傾けたりん、支那人はよく胡桃を掌表ゝ入れて玩弄する。それをやると中風防と羅うていとあるが、掌裡で掌を北の丸子を動かしてみるのが自然氣血を運環することろから彩くこのよう

と見くるに、あかし彼人を中底の線ばかりなるにかすかに
掌で之んを弄する明懐い執業を事とするあや
手で霊法の働きを為す工芸家ともなる、掌の
コワバリを後和する効けもよいことを相業とあと
風に外。大体支那ひい二個の胡桃を掌にして武い二個
の摩擦をなすを為せさせるが、或い彩を絶体に立
外せるいやうにもなるとのうるが、此等の胡桃をい
山あや人物もの細刻がしてあり、手淳を経たもの
ハ珍瓏珠玉のごとく見えるといふ。
柿瀬い支那料理に就ていろ〳〵珍らしい中に、ゲンゴレスカン
料理と名の付いてあるのを人々の支那料理で初めて
聞いたとふ。のを少くくと、鍋に貝類を入れたまに菜

榛原製

味を抜いて塩梅をなし、鍋の下にアルコールをもやして
猛烈の火氣で煮ると、貝い殼が溶解して仕舞ふ。
こへ白色の菊を堆くうく入れると、火力のひい為る
くぺッツリ焼まるのを、貝が心つけダシとなる。和し味
あのであると云ふ。えんいうこと少なから大が出の表ゆる料
理と見へる、日本で支那料理ことく、何人ものんなも
手あり次第に入れて煮ることあらしい。ゲンゴレスカンの
名の付いてあるのも恐らく料理の表外宮さんをねる
かと思はれる

十一月廿五日

○山来デパート其他の洋品店に外国から輸入の帆
の小模品を見る、もとハ飾り素さりしるせ、よく見
ると各時代各国のあつて、まゝに古色まで擬し

なるべく、骨董として亦興味あるものなれども、價は三十円以上乃至五六十円まで、一寸買ひまくれ、為めこんまり買入を躊躇しがち、女兒はお茶者たりとも嫁ひ来り、余は無不景氣なる世相の為め十分許さず、亦家業一切千石船四十艘あるしを表示せず、こんは家運の衰亡を祈る也、除夜の祝に飾り年首にも飾るべしと、余はこんで先づ机上に置いて玩ぶ、但し此上は紙業の台湾船あるまで氣づきし事、完から船投師の書面に似たりと一笑す（十月

複原製

○今年甚だしく困惑を感じたのは世界的大不景氣の為め、早大出版部の事業に大なる影響があり、或人と事業を半分以上減縮することになる。而して三割位の配当をなすべきを、諸つたるが、今は全く金融の途も杜絶し、前期よりも配当なく、今年のみ除配なる。一年四箇の経費を制減するのみならず、利益事業継続の収入を主とする投機に商りたるなり、果敢の改革を断行し、前年度よりも人員を減じ、報酬賞與を減じたが、更らに勧業の大谷越をなる方面に力を入れることとなる。つまり、一年四箇の仕事をうまく全の如きも出版部の

六、不況対策

(1) 現業取締役ノ俸給ヲ更ニ表割方減額スルコト

(2) 使用人ノ給料ハ月給百五十円以上ノモノハ表割五分、百円以上百五十円未満ノモノハ表割四十円以上百圓未満ノモノハ七分ヲ減額スルコト

(3) 高田給顧問、市島主幹ハ報酬ノ半額ヲ辞退セラレタルコト

(4) 取締役及監査役ノ期末賞與ヲ全廃シ、現業取締役ニ限リ期末手当ヲ支給スルコト

(5) 使用人ノ期末賞與金ヲ各割方減ずるコト

(6) 平取締役及監査役ノ報酬ヲ半減スルコト

(7) 温交會ニ対スル寄附金ヲ一時停止スルコト

(8) 大学選定ノ給費生ヲ一時停止スルコト

(9) 歳暮ヲ大体半減スルコト

(10) 顧問謝禮ヲ一時停止シ差千ノ歳暮ヲ呈スルコト

(11) 日清生命保険株式六百株也ヲ賣却シ借入金ノ返済ニ充テ剰子負担ノ軽減ヲ計ルコト

如き小任務の此の節約を為すべき事実容易ならざることなれど社員産業の現上に拘らずこの大異難也、然れども之を敢行せざるべからざるまつきにあらざる此の所行を為すべつた訪く

電話牛込 七四八 七四九番 三四七 三四八 三四九番 三四五 三四六番 三四三

早稲田大學出版部

前月繰越		81,200 円
役員賞與		5,200 円
役員報酬		4,690 円
使用人給料	（臨時費 9,349円 / 賞與 4,062円）	13,411 円
原文會		1,000 円
海外會		700 円
使用人賞與		3,000 円
賞與年元		1,600 円
月賞與積立金		2,000 円
計		40,677 円

減

顧問報酬及謝禮

電話牛込 三四五番 / 三四六番 / 三四七番 / 三四八番 / 三四九番

（ロシヤ革命の常態と復する見込）

まだ八住侯爵の常態と復する見込が故に社長辞任者に任ずる形勢にあるが故に社の改革八十年前の舊態と戻らざるを得ずこゝに不墨氣の活躍を体驗したり、

日常生活の食物八一は純ての吸菓の淡泡を好つて来たが故に俄後為に二度し此ものを八一が俄後のつ人八十歳果が淡泡を言葉にもあるとかで、皆な南方であるらしい、松茸飯の如きは世界的にも食餌を食餌する載也、婦人と置いた郷土食味まで出てかく自からを加へて郷土料理と云ふ所を減ぜり。

八一から寄せられる、ぬめり子と云ふ茸が有り、其比、代が有り

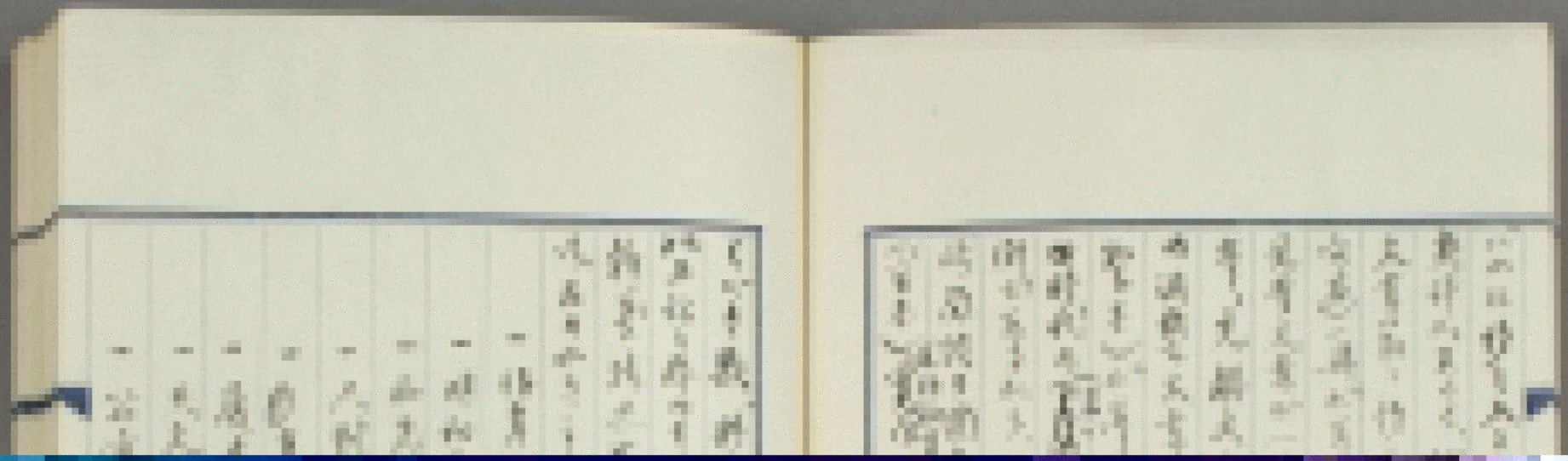
早蕨の芽良法がある、河豚と別来の鮭の味噌漬が
ある、北京の翠湖を産する蓴菜の野田の比
しれがある。北海の味を今が味わうまで老来肉を忘し
ないから、殊に北海の味が下物としてまらしい。郷土の味
は何人でも懐かし味がある。が公味は別にしてある。喫飯の菜
は自分が郷土のまんまるへかと西子を尋ねて、大根の味
噌漬を物書きしたのを改めかけるといふ。こんな素
朴なものである。汁まいは蟹をダシにして白菜をやとら
かした奥に美を西子が心のこんな味を口まねしたのを
自分の公味を道、味は無くて、酒の下物として酒盗もあ
れば文句を言はるいのだが、況をいろくのものが淡合
しにのでいろく公餐を張ハーとしたのも一興である

榛原製

九月

○自分は従来古文書の蒐集に特に意を注ぎたことは、言語
義彦氏公中あの人が古文書を集めはじめたから、一時は自分
が都度に得ると従ひ、皆ると言語の後
後まで全部が今の手もとに残しておいたから、今の相当の数がある。二
回程前に史料課へ二十数点(文書数百点)を貸附した後、高等中に帰ってきたものが
相当あるが。漸やく多くなると、煙草を献山現した四五
点あるが、乱雑さ、アルバムに貼ったものとアルバムを整理せ
ずにあるものを、アルバムに貼り込んだものとがま
ぜ雑助雑義を張り込んだものは手が及ばないこと
も近来の内手をはじめて古文書は抜きまう、古文書アル

十一月二日



一京都御今宮鎮座 琴歌譜 映写（口上本一冊）
一延元元年和泉国和田左近将監合戦状 口上二集 解説（キ）
一聖武帝勅大小王勅書 摸版（口上）
一聖武天皇勅寄封五千戸 口上 口上
一同治二年金沢藩行令 口上（手四）
一同治三年作食藩行令 口上（口上）
一横須賀長官記 国 口上
一箱根関所文書 摸本粉写 鶴版本一巻
一慶応保元真跡 摸版 鶴版本二集本五
一弘化四年神部位宣命写集 鶴本三冊
一慶長十九年河内平野郷禁制 映写 口上
書きまゝ見たゝんでもあるが、玉石混交であるから他の

閲を待て取捨し、アルバムに張りかゝる必要がある。

追加一 楠正成奥判文書 前田本摸本一通
一 野州阿蘇郡 千村宗門改帳 寛政十二年 写本
一 法隆寺金堂仏像等目録 鶴写本
一 朝野群載集古 二巻
一 城郡盧舎那銘拓本 一巻
一 王子権現社縁起 写本
一 作法日記 三冊
一 新田舊記 写一
一 恒例摘要 写四 写本
一 高僧法要抄 写
一 中尊寺古実武三書手数

一 古歴案集
一 天保度所司代日記抄
一 伴如村鏡
一 後鳥羽院御宇鏡 流説書 写本 芝山宮本
一 日本現在書目 室生寺 影写本 帙子 冊 没元 賀茂家
一 元禄改元図
一 神祇官 数聚書 二
一 江府神社略記 京伯 二
一 去来日記 真書 写本
一 宗像の記

以上列記の図書の内文書と雑へものもあるが且〜〜
奉げて置く

榛原製

の昨夜の夢と消ゆる花井早苗の美貌を偲ぶに、原因い寂寞
る愛いれ見斯火鉢の煙草盆の如きものと云ふ。かゝ
を用ひる家庭の注意思きことである。自分の花井を識
つて居るが親交は無つた。彼れの徽岸で一癖ある男であつた
が頭脳が明晰で活潑男で一天才と云はれた。彼れは廣島出身
で亡友早速整爾とは自然競争の地位を争つた。早速は表
面は淡泊に交つてゐたが内心は許さぬ所があつた。彼れ
の若い頃は三茂山田喜七助の弟子で立つた。乃
ち山田の門人であるが、山田も彼れの徽岸で手古摺つたこと
がある。彼れは「つ」で居る居ると云ふ山田を呼び捨にするのだ。
山田が詩を作れば彼れも詩を作り何れの日か負けない居
きつと出る。自分等の若かりし頃、神田の金清楼といふ料亭

屋がありに相模の大きい家であったが、自殺記に書生を多
くとり、彼れは芸者の娘と恋に落ち終に納まって妻となし
ばかりの婦人いひうちにかかるに法華を学かうとかが金
沢橋と称人に頼まれ口くに許嫁し合つたものである。彼れは維持
の術を有つたが、女とは説まる功みであつたかも知れぬ。保
し彼れも時まの女に実行しもある。下谷の岐を長く愛
し子までもうしたのが為と皆いひた国流に奔つた。彼れの
金方をしに五万円の金を貸くて男を見せたとなへて
ある。彼れは我儘な男で人の霊鶴来の下に住んでゐたが
それから東京流浪して時から業流に属しるうつ
た。彼れは常に自己の主張のみを、強手な熱を吐いた。いつ
も時の政府の一敵国であつた。法廷に於ても彼れの弁論い

榛原製

清雅をして傾聴せしめた。彼れは中央大学の出身で学強
があつた譚じ無いが天才的頭脳を有し、早く世後から
侍士の推薦された。えい学問のかたもく名誉が知らし
めたまとえ後ぐるもの。彼れは名誉を惜すると抜け目
が無つた。その人のあるある行動言論は偉くて名誉を惜
んとする為めであつたとも云ふ。自分の忠やのは
そこにある。老青熱交を得るのと、自分の忠やのは
十二月四日記

○昨夜の大雷雨物凄が自宅の火災で毒を焼き殺し
たる赤花井が死刑の宣告で死人に免角刑律家
は次あるりの災禍と偽罪の罪を犯した。何かの陰因かも知
れぬ。昨夜明迄に吹く風が強く火早い氣節

とうとう[illegible]戒が[illegible]、防火デーを宣伝して、市中
列を成すポスターを張り、ポンプを市中を走らせ
ある。此の警戒の宣伝ポスターの効が[illegible]
こかしらこの人が男が肝腎な。百のポンプを用心が
一つ[illegible]と。警戒祝庭のポスター[illegible]
りてある。

○昨日[illegible]傷の白米[illegible]満蒙の長城[illegible]が[illegible]
る陸軍省が[illegible]の軍[illegible]
のてある時節柄[illegible]
ゆえ[illegible]人[illegible]も[illegible]ことが出来ず
多危険[illegible]引[illegible]個[illegible]
[illegible]心を[illegible]大切である。満洲の寒

氣の寒[illegible]といい列[illegible]出征兵[illegible]
[illegible]凍傷[illegible]羅[illegible]手足を[illegible]
異とする[illegible]ある[illegible]子[illegible]胸の為め
誰か一滴の涙なきを得んやである。出征将士の為め
[illegible]慰問することい都[illegible]
結果を得てある[illegible]子である[illegible]
第四の慰[illegible]出来[illegible]
あると[illegible]五十[illegible]慰問[illegible]
[illegible]出征[illegible]
[illegible]寒[illegible]
[illegible]等も[illegible]出来ます。図書[illegible]
書や[illegible]と集[illegible]
今[illegible]準備中[illegible]ある。図書[illegible]

書で奉公の一端を盡すことい當然の事ともあらう。將士をして後顧の心配なくさせる為めの留守宅に対する扶助を爲すことも、亦戦線に在る陰ながらの戦士の勇しさを決して慰問を怠るべきでありませう。

○前月の中旬から板橋区二人毎の来る庭樹の手入をやつてもあるが、二十の殺もかいつてまだ全部の手入が済まぬ。別に立派と廣大な庭ひもあるかのやうだが、僅かんの四畳敷の宅地で、日當もあり尾もあり数株の樹木が多いとまでも知れたあれあるを、松の樹の手入の一番手数がかゝるけれども其他も樹列烈しいまであるので二十殺ばかりの手間をかけて年二度

榛原製

殺程の手間賃を拂ふ。殺の多めといふ不経済の北上の無いことだが、別に庭樹が追々枯死するから撮ちまいこうしたら何なら松の枝が枯れて心もちまく使つたのが一二ヶ所を過ぎたまつた。玄関前の松は自分の為も大切なまつてあるまいが、下枝が枯れて長さ八尺を拂したが、自分の身体が疲れて先達こ松くの毛深くなるから如くで長とても病状を感ずる。

自分の家の附近に貧困階級が住んだ家がある三坪の土地だけ家から自分の土地ともう坪少ないもとい池もあり樹木もあるが、樹木を切り拂ひ、池を埋めて、四建物に全部平屋の前を建てつゝあるが、三戸共、相当の家賃であるから人合百

田畑の家賃がふんるであらうが、身分もうの繁栄又は
破産とーれら四軒位の貸屋が出来て男の住月収が
あるであらう、さーて相木の手入れ安とうるから植木
屋の手間賃も前日と、住居を論ずれば自分の考へ口と
ハ雪流の相違があるも皆又身分を住居を教へるか
のことく思あて、毎日外出の時四畳半の家前をこく。
四月分一代い先も角も手元不如意の子孫と手入を
要する庭ものを相続もしくべきでもいと。時勢不
繁昌しく生活に脅威を感ずる折柄、特に北の感
いがある

十一月廿日記

○もう文行者に二三の問者を解ゆ、やと一二紹介べき
ものあり、其角の十牛句図を永機とかおちやの

横原制

元成が寄ーとるこの巻一巻いおもーろきこのうち
永機宮ーの首端に其角の河者寄
世昔異邦の仏鐵翁の十牛を図ーて
人号迷悟の問を一ーめるとう美言
を在言にーとりて牛い声言妙者也
又及るもてあるこうるち能ちえこ
こーる十及絵画巡り作も実
も万世る獅子ーるの 寄号角
二基海の坂郷が市)ひもあり徐の順序図ーから
ず、うぶるやの元成図宮ーい庭柏子の宮ーと
るを宮ーとうとあり
尋牛の其角の句を云く

やこの物語ら[illegible]ばかり月数[illegible]
光牛こ云く
[illegible]
おらそ也[illegible]也二を[illegible]
故あり、
他こ宮本一冊 劉譚と[illegible]
の字未だ考へさるも、[illegible]譚と云ふ方[illegible]
かるん、墨形の[illegible]イレズミ[illegible]
[illegible]イレズミの形也異[illegible]
のイレズミを見る、紀伊の郡[illegible]
伊達政[illegible]

[illegible]

同形の烙印あり、あ[illegible]の[illegible]の[illegible]
宮を見る。除らしき[illegible]
他こ一巻[illegible]
を十二月[illegible]江戸時代市井の[illegible]
英一條と云ふ、著[illegible]
でいと思いつ[illegible]
[illegible]
く一條也[illegible]
○大阪の城址は[illegible]
[illegible]
傑作と云ふことが出来[illegible]
別長[illegible]

書役長などの斡旋で消かんとしたので、友人から寄せて
来た月給をもらうと、十四数と合ち二百四十余円か
出陣さんとするが中の二十円（七十四）のうちきりがある。
り、祝筆書きい　　自筆の手紙が来
で、種々の消息を知れる豊公の書と味をかまうもの
ばかりで用紙を見て驚いて感ずるもの奥味を感
する。月刊の各項を読み終わる和田の解説が附
してあるからおよそのものを知つて保存に値する（十
二月七日記）

○前に花井氏の事を話したので、江木衷のことを思い
出す。彼人は法曹界で無比の秀才だが、江木は早
く死した。江木は岩田の人で自分が東京英語学校に

標原製

入学した時、先生や学生の挨拶をした。其の面貌は温厚
同級生は皆なつくりであつたので、誰れとなく岡麓の
名を命した。誰れか南清北人が諸葛孔明の天才である
ことを想ひ、また南清北人が諸葛孔明の良人とな
ることを想ひ人やうの彼れの詩文をとりまして又書を能
した。北人は彼が自分と同級であつたので英語学校
陸軍、自分は一年駆け抜けて大学に入つたから、大学の
で岩田出身の大尾権平中原貞三郎などが同窓
であつたが江木と同窓で無つた。自分が新潟で新
聞の主筆時代に江木は新聞を未だ自分の居を

法つゝみなことがある。酒豪で大の喫煙家であつた。自分の家に来た時などは、着るものゝ三四十本の細巻のシガレットを吸つて、灰皿を一杯にするのを思い出す。どこかで共に酒を飲んだ人たちと相違するのかどうかは知らない。此人の花井との性格が異つて忘味がるく、流石酒の倫理と交り得る人物であつた。花井の此人の推挙で恩敬と親しん、起身の基を開いたと伝へてゐる。岩田の義弟の田尾義二弁護士事務所を置いてゐた。非常の酒豪で毎朝書生を擁して寝室に入るのが例であつたと云ふのである。

毎月出入する骨董屋さんが大形の抹茶碗一個を

複原製

貰らい受けた。伊勢の五十鈴を製したもので白泥の楽である。形は大神宮に献する瓦の様に似つれあで中央に桐鳳が羅画で彩を描いてある。菓子器に使つてゐるものの様である

十二月七日

毎年の例であるから、今年も娘を伴れて大隈家別邸へ絵子の日を祝ひに行く。力自は今年古稀であらうが、容貌は一向変りなく若々しく見られて元気とは思はれない。唯に目と耳とが不自由でお気の毒と思はれた。例の如く如才なくいろいろの挨拶があつた中に自分が元禄時代の末年数奇の人を紹介したことを覚えてゐる。高田馬場と云の様の様持を計らうと云ふ

て大枝の光輝を失つたとは、情まん、自分のうしろの教えのうちどうも淡が消んだ。力自の側くらに貧くしき神が臥しそれに素い蒲団の上に寝ゆして陽とんぼ迫傍つてある。日々の無駄い北の動物を伝えて越められるとえくる。力自の話しを毎の朝夕初雪と持ける米い庭内を歩く雀が集まるのが例となつて雀が集まるみるが、その時刻になると何んともなく雀が集まるとも来るが、なんが日こ増し数が強くなり、今い初雪と樹に米が付てんぢ迄ちるのを他の米をもかくて絞すことなく、一日二回雀の庭内を飛集するのも一寸見あたるものの氣慰めである。えまい別邸の西仏間いどこまあるかさへ

榛原製

知らぬ。それが何の仏間か開けてあつたのか、悔りが開けて入つて拝した。富い力自の居室と隣り、もと茶室とも心つれのを多く換換を義した。ここを住職や仏像などが居る南の表を心つて其上の四畳あれてあつて。神仏混合であるが、大農家に神家とあるとなんに内仏の愛毒である。老婆の爪や歯牙を脳内に納めて仏体を心つれ作あい高村光雲で、こんの厨子を入れてあつた。光雲い老婆四人を早く亡くなつた。心右とてはもの居る南北と思ふ。

十二月八日記

この部屋の多数を占めるのは故堂美の遺品等を置てることとなつて迎ぐれ人名い左の如くであるといふが、北人名の七分通りい自分の蔵書である

物故した黨員

民政黨支部で追悼祭

民政黨支部では十三日執行の追悼祭に際し朱書黨員並に黨に盡力したものにして故人となつたものその遺族を調査したところによると次の如くである

▲新潟市

鳥居錦次郎、本田伊平、安信九二造、長谷川寛治、荒川太二、鈴木長藏、八木朋直、鄙彦太郎

▲長岡市

佐藤文吉、松田周平、新保新造、豐張治平、中山長次郎、太刀川龍十郎

▲高田市

室孝次郎、中川源造、石塚讓、福島政雄、大井茂作、倉石知藏、竹内勝藏、瞞木定治、宮川小一郎

▲北蒲原郡

中野久蔵、井上南次郎、伊藤三之介、高澤安五郎、丹藤俊平、大野南八、野尻信夫、吉田善太郎、姉崎靜彌、武藤郡四郎、二宮喜作、伊藤弼太郎、下妻嘉平治、青木雄三郎、關倉鑒次、小林忠三、旋野餘太郎、坪谷嘉六、田邊久藏、高橋慎太郎、五十嵐基藏、石井孫太郎、阿部廉介、波田野農吉、高澤喜一郎、家田治七郎

▲西蒲原郡

山際太二郎、富所平三郎、平松進、那一郎、山田助作、山際佐之助、加藤彦四郎、島六郎、内田勇次郎、伊藤左武郎、幸田鉄

▲中蒲原郡

阪口仁一郎、中野貫一、板垣軍平、桂豐衛、桂重章、吉田久平、猷川善藏、猷川敏太郎、小野澤喜六、茂野芳平、服部雙太郎、笠原藤七、石本儀右工門、山田勢一郎、高岡忠郎、谷武二郎、鰐淵龜太郎、樋口元周、畠山嘉藏、佐々木松坪、玉井貞太郎、次郎、高橋太郎、長井周、應邊嘉藤次、渕井積藏、見玉政明

▲東蒲原郡

佐藤和一郎、杉崎勝太郎、杉崎高吉、清田常太郎、石川眞須美

▲南蒲原郡

大竹徹三、藤崎昌平、應邊憲司、吉原義雄、佐々木與三太、佐藤惣彌、廣川長八、大野源吾久、鳥邊貞治、田巻官平太、星野通岑

▲岩船郡

佐藤伊助、海沼英純、瀧澤重平、澤渡朝藏、鹿山銀太郎、黒澤重太郎、海沼市藏、小田長四郎、小杉祐次郎、百武平八、小田秀太郎、東海林久太郎、須藤皇吉郎

▲刈羽郡

飯塚彌一郎、内山憲二、小林源三郎、菅田文宗、西巻時太郎、中村藤八、大塚國藏、海津民八、佐藤貞雄、山田順一、藤澤敬一、小林嘉一、村山吉次、山口權三郎、山口逢郎、飯田惠太郎、牧口義方、安澤泰正、戸口仁三郎、内藤鷲郎吉田襄

▲古志郡

二國嘉次郎、大崎二六郎、外山茂助、井上戸久治、大崎周、清水清、平澤源次、川上淳一郎、清水寶人、穗苅一三、堀井八郎治、沂藤南

▲三島郡

久保美秀三郎、本間彌平次、本間德四郎、田中仁四郎、廣川庄次、林周二郎

▲中魚沼郡

燕木八郎左工門、岡田龍松、岡田政邊、村山直木、小落愛松、清水莊太、小海條作、石澤多一郎、清水藏、桑原重正、中澤久四郎、太田則三、俵山貞藏

▲南魚沼郡

小野塚藏之助、青木莊吉、岡村貢、岡村龍、林賴三郎、高橋彦策、中島正吉、大平幸吉、野上岩太郎、佐藤良太郎、上村長太郎、高橋字一郎、山田伊八郎、柔原雅次、應邊長左工門、上村四郎次、南雲清太郎、伊佐早寶

▲刈羽郡

西脇國三郎、久保田右作、久保田清治、山田又次郎、桝彌稲三郎、桝彌信四郎、星野道太郎、簑田良太郎、星野只二、新保弘六郎、小林須平、應邊彌右工門、石坂茂左工門、關利藤次、關八郎治、阿部清吉、古田島清作、中林哲九郎、眞島雷造、丸山茂嶺、石坂平八郎、岡村晋、池田龜五郎、池田佐吉、佐藤保多郎、樋口佐太郎、黒島太郎左工門、目黒德松、目黒孝平、目黒助市、小岩新造、關矢孫左工門、關矢橘太郎、酒井文吉、井口理八、佐藤又一郎、星專平、櫻井長左右門、山本竹多郎、高木權太郎、森山尚賢、下村五郎、森山惠吉、應邊憲治、櫻井清八、松原新三郎、伊佐早藏、田村寛一郎、井口藤、桑原勝造、松崎伊三郎、松田計治、駒形恒七郎、大平東作、遠藤總治

▲北魚沼郡

村山政榮、本山佛治、小熊清次郎、藤崎眞佐久、相澤松三、仙田壽作、布施才五助、宰岡剛、西山壽平治、佐藤文吉、成見仲治

▲山頭城郡

松原彌惣、鹿住源十郎、相澤勝作、佐藤長作、勝山喜作、高橋文賀、土肥善四郎、伊藤泰藏、丸山新十郎、太田孫次右工門、金子賀一郎、林彌一郎、山岸俊藏、勝山雄藏

▲西頸城郡

杉本茂右工門、寺崎至、應邊泰太郎、小林嘉太郎、保坂武一、小笠原九郎、伊藤重五郎、林善兵衛、相澤范太郎、櫻谷健治、富岡磯平、五味川吉雄、岡本辨治、竹内環、阿部鉄平、吉岡種雄

▲佐渡郡

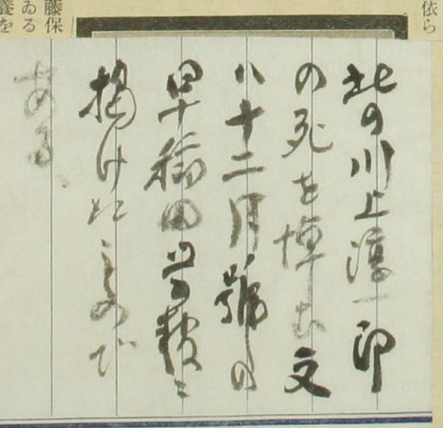
秋田藤二郎、河邊源太郎、佐々木增右工門、見玉茂藏門、笹井鮮作、中山五兵衛、沂藤吉左工門、相田榮藏、橘善吉、石塚秀策、植田五之八、鈴木讓次郎、市橋藏、澁谷良折、櫓飼郁次郎、磯部五八郎、河原作次、松本八十八、島倉祐次郎、山本藤八郎、山本藤右工門、吉田喜平、佐々木助太郎、海老名武十郎、風間安右工門、佐々木時平

越後の先輩校友と云へば、何人も先づ指を川上君を昆田君に屈するのだが、さきには昆田君を失ひ、今又川上君の訃を聞く、自分は宛ども兄弟を失ひたる如き悲痛の感がある。川上君と同窓の誼あり兄弟資ならざる關係ある廣井一君が、一ヶ月程前に出京された時、川上君が咯血して病床に在りと聞き、自分は深く憂ひて窃かに回復を祈つたのに、不幸それが不起の病であつた。自分は君と四十數年の交りがあるが、近年は疎遠勝で、三年ばかり前に君の經營に係る北越新報の五十週年記念會が長岡に開かれた時、高田前總長と自分は迎へられて長岡に赴き、久方振りで君に會し、一夕某酒樓に歡晤した時には、君は禁を破つて快よく杯を擧げ、夜の更けるのを知らなかつたが、今考へればそれが永訣であつた。

君が早稲田大學の前身東京專門學校に入學したのは、開校早々であつて、君は實に第二期の得業生である。君が在學中に起した越佐會は今尚ほ存續して、自分は現に其の會長となつてゐる。君が他の同窓と私費を投じて集めた圖書は圖書館の礎をなしてゐる。君は卒業後終始鄕國に在つて、專ら鄕國の開發に力を致した。乃ち今の長岡中學校も當初君の努力に依つて繼續したものであり、北越新報も其前身越佐新聞時代から君の經營したものであり、長岡銀行の創立も君の力に依るものである。櫟尾銀行は君が頭取である、其他農業山林等の事業に力を盡したことが少なくない。そして政治の方面に就ては、改進黨時代から終始民政黨側で、自分が鄕里で改進黨の爲めに同好會を起した際や、條約改正の運動をやつた時などは、君の扶翼に賴つたことが少なくない。君は嘗ては擧げられて縣會議員となり、又衆議院議員にも擧げられた。君は亦母校に對し何事に依らず終始盡す所が多かつた。君が牛耳を執つてゐる新潟縣校友會の結束の堅く、他の校友會の範となつてゐるのも、必竟其の創設の際君が努力した功に依ると云はねばならぬ。

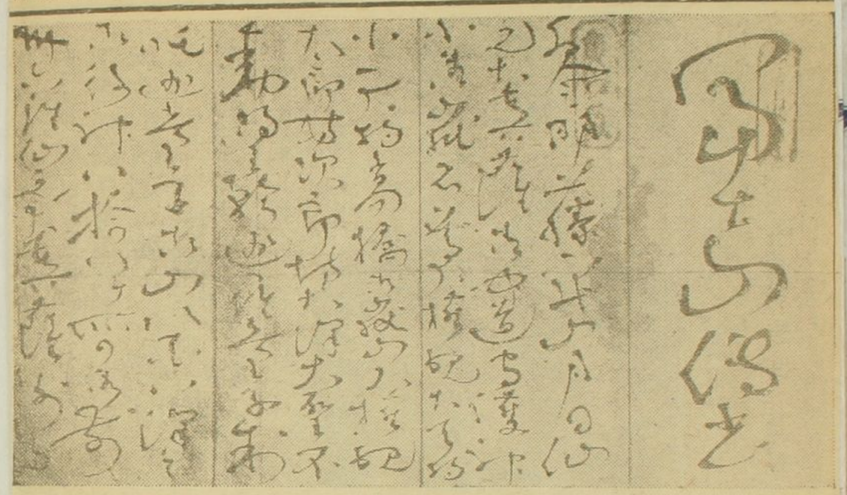
君資性温藉寛宏で、壯年の頃から長者の風があり、事に臨んで爭はず、常に中正を保つて、事を處するに偏倚なく、鄕黨は擧げて君を畏敬し、友人も皆君を兄事してゐる。君の如く終始鄕國に人望を博したものは無いと思ふ。君の家門に就て云へば、嫡男一郎氏は早大を卒業して家督を相續してゐる。令弟には博多灣築港株式會社の專務で工學博士川上浩二郎氏があり、女婿には上田蠶絲專門學校教授の農學博士遠藤保太郎氏があつて、家門は頗る繁昌してゐる。

君は晩年輕症の中風に罹り、數年靜養を續けてゐたが、肺患が併發して遂に箕を易へた。享年六十七歳自分よりも五歳若いのに惜しいことである。自分が毎年歸省するに一ツの楽は、君と會して舊を語ることであつたが、最早それが無くなつた。ひとり自分の悲のみでない、鄕國の悲であり、亦早大の悲でもある。



新潟毎日新聞　（年中無休）

良寛の書



[illegible]が越後の時、んだ國上山の麓に良寛上人の書は、其の清逸高なる人格の讃美と共に、世の推賞措かざるところである。殊に近來は上人のものとしいへば片紙寸墨をも貴重なものとして愛好家の間うて兎集し珍藏さること年と共に旺盛を加へる。

茲に偶然にも良寛上人が、四十七歳の時に富士山に立寄つて書いたといふ「富士山詩書」といふ實に天下の希寶が現れた。元來上人が關西方面から山陽道玉島や土佐方面にまで足迹遍いて居ることは知られてゐるが、關東に足を入れられたかどうかといふことが疑問になつてゐた。況んや富士山上に立寄つて修道の一修養をやられたこと林は在來の史實ではぐ明だつたのである。良寛研究の第一人者たる安田靫彦氏などは之は實に良寛上人の「天下一品帳」ともいふべきもので、且つ一面良寛研究上偉大なる文献といつて決して過言で無い。上人の書は元來懷素を學んで懷素以上に出たといはれてゐる。固より晩年の書が懷素に造詣するところの深いことは云ふ迄もないが、併し上人がいろ〳〵時に古來の名帳を臨習し最後にあそこに遠代は紙枝山あたりを學んでゐた頃と雖て神韻を合せる如くである。而も之だけに纏つた且つ氣合の乘つたものは全く稀しいものである」と嘆賞し、謹んで箱書きして居られる。

尚此帳は和歌だけでも五十餘首あつて悉く秀麗な々富士を讃ゼる詩意を寫したもの「文化元甲子歳神無月廿三日夜一時の間に之を寫す」と奥書して居られる。因に此の帳卷は關東の或る古刹から發見されたもので、本縣出身の社會事業家にして著述家たる渡部求氏の手に收あられてゐる（寫眞は良寛の富士山詩書の一部）

せられたことは、良寛の手紙によつて明知される。今私の持つてる上人が知人へ宛てられた消息の中に、行成卿の手本を貸してくれといふのがあるし、又文那の紀元明（紀枝山）の旋回歌といふ帳を寫したといふことも確である。此紀枝山の摹は現に長岡市あたりの寺の住職で、何か不都合があつたゝめに今は秋田あたりへ轉住してる人が所持してゐることを聞いてるが此の富士傳書の乘勢かつ樂して、此時

楊原庵

郷人海部求訪ひ来つて良寛の富士山詩書の所望文切り板を示さるれど。良寛が富士に登山せ書いたことは、こゝに意外なるこの事実、良寛の生涯の中に徒々佳作の筆跡のなすることが無いのが、此板のごとく初めて見る板であるから、是を喜ばるゝこと、なるべしと。

○前田松雲公消息三通）すべて祝筆かきこなされ候加賀の松雲公の事蹟を綜合して考ふるに、一通）は初名大炊の代の書名「満安侯」の中頃の名「綱利」書名「城侯」を除き、他の二通）は他の一通）は「綱紀」書名「荒井（新井）」を一名とするもの、

名ゝて晩年の消息也ゝ書面作成(或ハ筆写)ゝ也
前田家の一族と共に。北海道も亦文書部類と如
何係務して可也

十二月十二日

○内閣が喧嘩の間を交迭し、政友会の組閣の大命が降
つた。政友会の百七十の勢に二百七十を減じて有する
多数党が何故倒れたか。それは外から破られたのだ
ろう。自から潰れたのである。四難に苦しる支持の力
が無いとゝのが崩潰の主因である。閣員中有力
の内相が、政友会との協力を主張し、それが閣僚と
衝突したとゝが、不統一の暴露で、内閣の
崩壊を結論する理由となった。協力内閣を組織せ
ずに四難に當り難い。

横原製

が為めとゝ見なゝるが。内相が飽まで協力内
閣を主張して終に倒内閣の潰山明を導いた真意
はまだ分らぬが、内々政友会と交渉もしたとある。そ
の交渉の結果協力を得べしと期して、実現つたの
かも知れぬが、その結果のどうかと云ふと、唯だ荒槙内
閣を倒したるのみ、政友会内閣がこれに代はつたまで
で、どこまで協力の真意の無い。二百七十名を有す
る多数党が百七十名を有する少数党と政権を譲
つたまでの事である。力強き協力内閣を実現するか
為つた内閣と政権を譲り渡したまでである。あ
達内相はしどんな秘策があるのか知らないが、その結

果は飽くまで馬鹿げてゐるではないか。

一閣僚が飽まで主張を貫徹する、絶対服従を為す

ことは、憲政の悪例である。既往に例定の例がな

いとも云へぬが、所謂こと保守(ほうる)する程、将来必ず

ある閣僚が自内閣を倒す為めに地を自説を維

持する為に相撲を取る相撲(すもう)の首

相は閣僚を養蓄しておくものである。内閣に責任の

不一致を生じた時は、其の閣員を罷めることも奏

し得る筈である。然るを固執し得ないのは、内閣

が室内に有力の地位を占めてゐるのだ、どうも出来ないと

云ふ為めである。全体一閣僚が内閣の運命に関する

重大事を論ずる他閣員と交渉するとは、勢ひ入

つ[illegible]の[illegible]並びである。政変の首領は荒槙首相を

常任の為めに[illegible]来ない[illegible]。政

内に勢力を[illegible]出来ないのである。

内閣は一流の自分から脱党したこと分裂を生じ

党と大なる影響を[illegible]。新の如き光亮首相

[illegible]は統率力が無いからである。一党[illegible]する統率し

得ないのである。[illegible]して閣員を当り得べきや、首相

の無力は内閣の崩潰を来したことが木南

[illegible]ら[illegible]内閣の首班一党の領袖(首)大人物を

[illegible]とするかは、今日の情勢に於て最も

痛切に感ずる。

最極内閣は最早飽まんとする([illegible])ではないか。

りとて後継内閣に政友会を迎へんとする大命がたつても歓
び無い、其の拙劣なる政友会
呼の声を聞くのみ。そもそも其の云ふ、田中時代の政友会
内閣の不信かまた国民の脳裡から去らないからである。
国難を面して挙国一致を解散し、選挙を
やつたり、地方を交渉したりなどは、毎事の上に毎事が
加はる。国家の為めこんなことが慶ぶべきことであらうか。いくら多数を誇ぶるとは中奨がなく
国民の信望を有しない少数党は仮令せしめても
八決して宏政の常道といふんぬ、嗚呼じんめるに
金の未だ日本を忘れず宏政の美を思ひることが出来
ないのである。

十二月十三日記

政民協力派の大陰謀

秘密裡に連判状作成

犬養新内閣の成立に際して久原幹事長は十二日夜犬養総裁を四谷の私邸に訪問し関係の経緯に富つて強力に協力内閣説を主張した、しかして犬養総裁は勿論これを言下に拒絶してあくまで単獨を以て組閣する旨を確答したがこれを機會として政界の一大陰謀が暴露した、即ち民政黨における協力内閣論者の安達謙藏、富田幸次郎、松田源治、山道襄一、中野正剛氏等一派は遂に若槻内閣を瓦解せしめ政友會における協力内閣論者の久原房之助、望月圭介、床次竹二郎、秋田清、山崎達之輔氏等一派は今回犬養新内閣を組閣難に陥らしめた、しかもこれ等政民両派の協力内閣一派には秘密裡に連判状すらも出來て居り両政黨内には裏面に相當多數の賛成者があるものと見られて居る、かくてこの協力内閣一派は時局重大を表面の口實として憲政の常道を破り政治家の節操を冒瀆して陰謀によりひたすら政權慾の満足を達せんと試みたがその計畫は見事大失敗に帰したのである、要するに民政黨内の協力派は若槻内閣を崩壊せしめて彼等が政權に接近せんと試み政友會内の協力派はまた今回の政變を機會として民政黨内の協力派によつて自黨内における政權は挽の優先權を獲得せんとしたが、聰明なる西園寺公はよく時局の重大性と憲政の常道とを洞察して前例を破り犬養総裁に大命が降下する以前特に犬養総裁を招いて単獨内閣を組織するか協力内閣を組織するかについてその眞意を確かめたる上

犬養氏は単獨内閣組織を確答した爲め同氏を奏薦し遂に彼等の陰謀は一敗地にまみれたのである、

その結果我國の政界は幸ひにも一大不祥事を脱れたが内外多事多端のこの時局に當面して彼等の爲めに政變を起し彼等の爲めに新内閣の成立を困難ならしめた事は我國政界の爲めに千載の遺恨事であるといはれてゐる

今朝の朝刊新聞の内容を左の如く報ず
前掲のごとくと雖も

田上記

隠謀大臣の[illegible]に畢る。大原の政治内閣の一員たりしも北の
隠謀の為めに[illegible]岡雅に命じて協力の美名に藉り、内閣の[illegible]
命を賜りての大略略、[illegible]
愛恵がつきる。

○相変らず日々の教案に小品骨董を漁るのみが分心
のもとなりつかるに、北の[illegible]の前者と錄したる以来得れた
び[illegible]やうなものがあるとかうに。先に奥方[illegible]に渡れた時
に[illegible]の寒山寺を擬したが、[illegible]
[illegible]のあり[illegible]寒山寺の焼印があるから
買つて来た。亦北[illegible]白木屋で清涼[illegible]みつを
こと清涼の高[illegible]心つたペン軸があるから買つて来
た。北等のこと化金[illegible]自身に[illegible]味は無い。扨

横原製

井代浦士が西洋から持つて来た[illegible]中に、[illegible]附
[illegible]
[illegible]も化金の為めに小品棚と[illegible]た。柿[illegible]の年が支那土産
の[illegible]の新人形二個を持つて来た。日本の新人形
[illegible]と一緒に[illegible]巧であることは[illegible]の新作と記れが美
[illegible]小品棚中のものとした。坊間で得れたる[illegible]の婦人
合奏像等に土彩の土紫婦人像がある。共に外国製の
[illegible]や、時代がある。[illegible]
[illegible]
長さ二寸許の小[illegible]三個の銀[illegible]が[illegible]
[illegible]巧のものである。[illegible]心の香合の巻子形[illegible]
中に置く心[illegible]扨、伏流の[illegible]心の銅印

ハ蓋仙人の鈕があり特徴である。銀製の大煙子ハ外国人向の例の胡椒入びである。他ハ北斗七星の数ほどあるが紛失れいくつかあるが、えんあるを考えるとくるまとなる。鉛筆ケガリもいろくのあるが当来もある。元折機器の説こえんもあるが、スポーツのおもん、弟こ年ぬひ形のつれこまが一種海行の世話をする者のをえり入れ比。木彫の大里天ハ特徴ひいるへが時代が古ないのひ自ものの味がある。西洋玩具ひ雪中サンタクロースがレーン、デヤひ車を駆る西洋の季節のこのもも元入れ比。まゆ他ハ数眼あるが一々紹介するのもえ。四麦えんまぎ品部類れ入れをろ比花子の品玩石がある。そなり美芸等を北の部類に分く比。美ハ皆住品ひある。春琴が寸碧と名つけも自から数通ーもあるれへ

大堰川ハ浮比とあるが鞍馬石の産品ひ山の形をもつもの多のが一つ。天竺山の銘のある西石ハ山脈複雑のもひ珍がある。紀州の布流谷石也かるんど住品ひある。支那産の品自然石ハ皆ある山態をもつもの多ある。此等をもくて金ハ年の上比陳列まもあるが多ち。他ハてりやの主係ハ似比自然石至稀かるる。えんハ品第中一比ハ比へることもれ。

（十一月十三日記）

○行路の途中ひ鶯を聞つて防其を釣ることハ久しく安へもあることもれが正確ハ月日ハ名もハるが、その由来ハ委しくハらるるも比、然るに明治廿七年黄土比の人が北海道ハ就て一冊を出版してあるとあるが初めて手ハ入つ比。えんハ他ハ、此名ハ伊勢国野間部ハ波止濱ひ、此者ハ茅行者

松浦三左衛門郎ちなみに此の人は海産を多くの物産のあ
る譯は唯此神社の祭を怠らるゝ故にあるといふが、豊公が四百餘年
後の有様を予め察し給ひし事実を九州の沿岸に求めしに、
有朱浦は其位置一田義右衛門を九州の防禦に配き
珍奇の物品を拾らしめ、之を船に積み大坂に向く
る途中伊豫の齊灘で暴風に遭ひて難を去
らんの一小湾に避けしに、北風の横雨岬の東端波止浦
港なりしが上西北二里許の所に此の義右衛門と云ふ。義右衛門は立派な
義士森某の家に数の宝物を寄せしが風雨止まざる
ことなりしが、無論義後の報が伝はつて、義右衛門
程日を経ず後ひあつた。南の朝鮮征伐中に於ては
衆を祝し、もしくは、船舶に幸と貪欲のものとし

か敵に死の報を耳にすると悪心を起し、義右衛門の
不在に乗じ海を渡り重要物品を奪ひ船を焼き
去り、後に残る義右衛門の妻子は岩殿と
海面を眺人を自殺し、其が慶長三年十月なりし
る。義士の墓は慶長三年八月十三日なりしから、五十
餘日の後なる、村民は此を悪怪の死を悔み小祠を
建て、其の人を祭り、そして廣津
明神と称せしめ、廣津の産地が此を廣
津と云ふに此なり。慶長
後文政十年五月来島の漁夫鶴を過ぎんとする鶴の
群を捕へんとするを得たり、忽ちつき鶴を吹て
海を飛ぶを釣り上げることを始め、爾後獲る所のかくず

絵を出すをこうりくうるりり共母を庚津磯と称す
ることをうる比。常つねに庚寅島も海あり（モグリ）を備へ
三十尋の海底を潜下し一尋まへの蒸を取採る
とし比が、偉かばかりなるしか取んなるうとしたる。北方の
記まる未だ大略あのことをいで、国と接つて蒸をえるる蒸の
而るを只亂るるく実のまもあるも、者と保たることである。
余が前年蝦夷とまへ古磯の大形蒸磯は、まるい蒸
蒸の庚の極小の貝が実の生しみとなる止まる、蒸の全面
は永くみさえて光沢は失せもあれが完霞のまれあ
つた。蒸まるる海中にも浮るるよう蒸と波止浪の磯
ることを止まるる堀港隆時代庚船を船載した
磯船しるるものもあるべし。余の得ざるい北の部落に属

樣原製

確操の父
を光翼
とする

するものもあるべし

○建保親人歌会の図に実朝の蒸
宮とあるべ、敢てなるいこまれ、滅多に手を入
るる親人俗の由ひは最も古雅な風俗の蒸を
ることの蒸、まるまれ歌である。往年津山図書を集め
た際のものもまるべるるるるが此の偶を獲た、一時價
三十円を下らるるるれ今は十倍するまれ蒸
た。

○赤余の著書なるべき價値ある日本外史を得た
長崎豊山人の天蒸確操が刻苦した所である流
布外史の評注評點を集めて鑑賞するかく示各
書を蒸る伝説の殊を勢蒸蒸蒸蒸蒸蒸蒸蒸

等遠城ちく經羅す汚人の様ちとも無論採取しまう
日本外史の忠ちる士のと言ふ、駿の川紙屋
ちて藩主本に家義に北条氏滅くの注書を得さる
が為に北者のめきい家義として取さる事也
○醫家奇賞は文政年間田澤法眼の編する所にして
関する佛典七種を集めたるものなり其目次左
柔世者波世經　安世寺
柔世者城因緣經　同
金光明最勝王經　義淨三藏
叡世音菩薩合葉經　伽梵達摩
金剛羅尼童子威德經　大唐罽賓三藏
者地經　安世寺

複原製

醫女人經　全書　法賢三藏
佛の五時あり醫は五時中第二の長なり、而るに今は偽い
なり、こんな僧かん經文中醫に関することを採
除しなる也經文に無文法の金の如きことを讀みて
一題を新んだ則ち足る。
十二月十五日記
○本の出版部は因宗内に雪洞の山水を畫いたるあ
をるも、大概のものと複雪しなるやもあらん
思ひのの、本郷無為町の雪洞中の
ときは、因の北海道の雪洞中の
一幅ちも絵屋に立て売る雪洞模糊なる
素読の因稽けも鶯なるものの
市谷指動き通て獲も脳海に借て、傍雪洞

北海道峡谷中の第一谷のこの也

東すること北峡地川市に東南東四〇粁、大雪山の
東北山麓を流れ下る石狩川の峡谷也 石北線
上川駅にて川を渡る二四粁にて層雲峡駅に入る
渓谷こゝに始まる

第一図 この探勝はこの蓮華峡東大函の
峡谷なる一〇粁の間で、六角柱状の節理の絶
壁と流星流雄滝 銀河の滝 雄滝 以下の飛瀑と全
然を極める原始林と実に生化の妙境也

第四図 此処に来て見れば手元を六海ふの釣り、数分ち
入れば夏の日の涼を供する数

○余は曾て頼山陽を著して山陽道の名を博したんだ

標原製

実に日本外史は少年の時一回後通りなる通きに頃は
住本を得なるを機として通りの後、頼朝位大乗去オ
の話を命を現後し卿る通無味を感じ、喜を手ま
すれば忽ち数時間を過し巻を捨て難き思を
与ふ。山陽の文は史の筆に最も妙を尽す。北征の
詩を読まざるべからず、少年血気の時読んで此
を感じ、今の今切つて然る少年の時と読過す、山陽甚心の家今初めて知
るもの多し、往年近衛公爵「精神」を刊行し
四人をして古人中最も心服の人を挙げて証論せし
古、余は信長を挙げて之の在りしことを憶起
す、試みに信長を外史に就て読むに、其人の

家康は敢て変せざるも、信長は戦国時代の模範
猛将なり、其志は雄大なりしも、其の挙措は日本伏
する他の豪傑の及ぶ所にあらず、豊臣の如き
畢竟主公と私淑し、なる過きず、本能寺の変の
如き信長の為めに悲まざるを得ずと雖も、豪邁の
人徒らに怨を買ふ、必ずしも信長の為めに惜まざる也
唯だ彼の変ありしが為めに一統の功を全ふすべかりしを
惜まるるのみ。

○世間多く養子の境遇を憐む、其故何んぞと云へば、養子は概ね自主なるが為め、
若概の如きの再び首相たり得て而かも其の地位を擲つの急卒なる前後共に同じ、其路

複原製

みなく、の無きに人をして呆然たらしむるものあり、彼の
確信あらざる能はざるまで弱人なりしこと多く得べき
ものならずや。人は云へ彼の如き多才なるが故に軽佻なりと
雖も然らん、余は之を見るに彼の二子共に養子軍
なるが、初めは義弟の内閣の首班と張り、後に病歿し
荒概其後を承く。次きの内閣は首班と為りも
の歿するや迅速にして亦其後を継ぐ、共に彼の自分の心
に適する者なるが故に自主なり、其足元の
グラツクも猶ほ一層強きに過ぎざるなり。養子の尊敬なき
は古来無り、政治に於ては荒概は唯だ切の例也

○内閣の変動とは金の禁止を解く。これを例に
大お場と張つたこの三井あり、三井はどれ程の九千

黄田備けと云へる。久原が内報をペテンにかけ
も自から備けんが為めにと云へり。現に久原の手先で
ある二百黄田備けとて、内報も備けの為
めの陰謀にとさへ傳へらる。其事実の如きは未
だ正確なる能はざれども新聞紙は公然之れを記し
て憶らさるを以て見れば決して虚説のみとは思
ひ難し。恐らく政府が解散を断行する日
は三井も亦備けの一割位は投出して選挙費に
充てるの有志)をいと誰れも思ひ無理ならぬこと
なり、三井の為めの首切は恐らく久原程安達に
行はしても成功せざる黄田の国賞三井にも下えかね
国の更迭を傳へる利用するは今度が始めも也恐

榛原製

るべき世の中にて世の淆乱を来たす
○四中堂の報する天世集民報を読むに支那は盗賊
の国にとて云へる賊首種々分類して
本馬賊(即ち常馬賊)
准馬賊(都合により何時でも馬賊になるもの)
不定期馬賊(敗残兵の類)
兵匪(不正規雑兵の類)
土匪(一般的賊團、馬賊に共通のもの)
閥賊(軍閥にして馬賊に通用するもの)
官賊(政権者にして馬賊を操縦するもの)
雷同賊(學生等にして馬賊に雷同するもの)
便衣賊(前記のいづれにも便用されるもの)
の吉凶は皆らな
いが支那の盗賊を掃蕩して
みる所は外ならず
るまい。実に云へ
ば軍閥の隊長
なども馬賊の頭
目にもなりうるとかいふ。○西游傳の豪傑なども
一種の馬賊の赤市なり。歴史報の天子なども賊首の

日記に魂がある

加藤朝鳥

日記のなかには一つの魂がある。此の魂は日記を記入する人の魂とは別な魂である。日記を書く時誰だつてもその日その日の自分の經驗を不正直に書かうと云ふものは無いのであるが、しかも日記には書きあらはし得ない一つの魂を保留して居るのである。これは必と云ふ意味は、口から吐きだした言葉のなかに言靈があつて一たび言葉が自己から遊離して出てしまつた以上、自分ではもう制御のつかぬ魂の奔放を發揮して來るものの如くに、日記に於いても、その日その日の思念をひとたび紙上に文字として固定させてしまふからつて差し閊えなく、かくのごとき人生觀を持つことは、何んとしても人生を深刻に有意義ならしめるところである。日記なき人生はスコアなき野球仕合のごとく意義がない。人生をざつくばらんにぼんやりとわたる人間ほど日記などは書きたがらざるものであり、人生を深く考へて居る隱居ほど、日記をもつてその魂の意義を發揮せしめて居るのである。近代英文學上の最大の畸人とも云ふべきサミュエル・バトラ（エレフォンの著者）は生前文壇に認められることなく死後餘程の年月を經てから、その日記によつて、大に認められたのであるが、彼が日記をこまごまと書いた心持ちは丁度昔ギリシャの

一九三二年

日記は どれを選ぶか？

のに適してゐます。

昭和七年度

日記定價一覽表

（○印を附したるは今回新規に創刊されたるもの）

	（日記名）	（國名）	（定價）	（送料）
當用日記	博文館	家計簿（荷物・原紙）	六〇	八〇
同	同	○新堂中日記（袖珍・上製）	四五	一〇
同	同	○園藝日記（小形・上製）	八〇	八〇
同	農業文運堂	日誌（四六判・洋布）	八〇	一〇

サミュエル・バトラの場合の如きはむしろ、日記を書かむが爲めに生きて居たと云つてもいゝ位であり、日記に人生を托してしまつたとも云へる程であるが、普通の場合に於いては日記は勿論その日その日の經驗の記錄であり、期望のステートメントであるに過ぎない。しかも之れも勿論、自分の魂の分家として、常に本家の動搖浮る。永續を欲する魂の本能的欲求から出たものであり、しかも、此の日記によつて後年ヘンリイ・ジョンズが立派な彼の傳記を書いたのは正にその日記が魂の働きをなしとげた所以である。

＊　＊　＊

力あるものとも云へる。然も力が所詮はけんぶ支那ひの伺ゝ
ぶもちゐる。支那の古い言葉に鈎を盗むものは誅せらる
ん国を盗むものは諸侯の門に入る、歴史の示唆
が裏がきをしてゐる。所謂文化の国の国邦の鏗おが無
へいさうぬのん、服装の考へ方もまた左程
ちんとする。彼等四も実い盗賊、兎角本能が時
り現ハんと来るのだ。

榛原製

力あるものとも云へる。然も力が陽であれば反那的の力でもある。支那の古い言葉に鈎を盗むものは諸侯の門に入る、とあり、珠を盗むものは諸侯の裏がきをしてゐる。昭和天皇の御聖徳、聖戦の目的、聖戦の完遂まで盗賊の左翼的思想を徹底的に撲滅、兎角本能的時代

日記に魂がある

加藤朝鳥

日記のなかには一つの魂がある

此の魂は日記を記入する人の魂とは別な魂である。日記を書く時誰だつてもその日その日の自分の經驗を不正直に書かうと云ふものは無いのであるが、しかも日記には書きあらはし得ない一つの魂を保留して居るのである。これは必ずしも秘密ごとでもなく、自分でも書き留めて置くのを恥しいと思ふほどな無疎な、乃至は、卑賤な低劣な根性と云ふわけでもない。

しかも日記を書くことの眞の興味は此の書かれて分離した魂と、書く能はざる自己の魂と、此の二つの魂の對立し、相接合しやうとする無限な不盡な努力の上にあるのである。此の二つの魂の距離は、少年の間はなか〳〵に大きな距離でもつて遠ざかつて居る。が老年にいたるにしたがつて、やうやくにその距離が接近しはじめて來る。遂に死んで日記をかくことが不可能になるに及んで此の距離は消滅してしまふであらう。小供は正直であるが、その書く日記は案外に嘘が多い。虚勢でいつぱいである。小供は悔悟の文字などはつかはない。

日記そのものゝなかに魂があると云ふ意味は、口から吐きだした言葉のなかに言靈があつて一たび言葉が自己から遊離して出てしまつた以上、自分ではもう制御のつかぬ魂の奔放を發揮して來るものの如くに、日記に於いても、その日その日の思念をひとたび紙上に文字として固定させてしまふからには、そこに牢として拔くべからざる第二自我としての遊離體が出來あがつてしまひ、そこに自己とは別箇な天地が、創まつて來る。そしてその別箇の天地が、時に嚴掟のごとき重くるしさでもつて母胎である第一自我を糺問することもあらうし、時には天使の如き朗かさでもつて、淨滌して與れることもあり、時にはまた轉轍手のごとくに自我の行く手を決定して與れる資料ともなることがある。だから無神論者と雖も日記をつける時は、神に默禱でも捧げる樣な餬つきをして居る。

＊　＊　＊

人生の一切はたゞ『記憶』の爲めに存するなどと云ふメエテルリンク式哲學から云ふならば、勿論人生は日記をつける爲めにあると云つて差し閊えなく、かくのごとき人生觀を持つことは、何んとしても人生を深刻に有意義ならしめるところである。日記なき人生はスコアなき野球什合のごとく意義がない。人生をざつくばらんにぼんやりとわたる人間ほど日記などは書きたがらざるものであり、人生を深く考へて居る隱居ほど、日記をもつてその魂の意義を發揮せしめて居るのである。近代英文學上の最大の畸人とも云ふべきサミュエル・バトラ（エレフォンの著者）は生前文壇に認められることなく死後餘程の年月を經てから、その日記によつて、大に認められたのであるが、彼が日記をこまごまと書いた心持ちは丁度昔ギリシヤのナアシッサが自分の死骸の傍らに紅壺を置いて自分の死顔を美しくする爲めに、頰に紅を塗つて置いて與れと遺言したと同じ樣に、自分の隱者としての生活を死後此の日記と云ふ紅壺によつて飾つてくれるものはないかと云ふ期待を持つたからである。しかし此の期待は決して功利的な意味での期待ではない。矢張り自分の魂を日記のなかに遊離させて行つただけである。永續を欲する魂の本能的欲求から出たものであり、しかも、此の日記によつて後年ヘンリイ・ジョンズが立派な彼の傳記を書いたのは正にその日記が魂の働きをなしとげた所以である。

＊　＊　＊

サミュエル・バトラの場合の如きはむしろ、日記を書かむが爲めに生きて居たと云つてもいゝ位であり、日記に人生を托してしまつたとも云へる程であるが、普通の場合に於いては日記は勿論その日その日の經驗の記錄であり、翹望のステートメントであるに過ぎない。しかも之れも勿論、自分の魂の分家として、常に本家の動搖浮沈の以外にあつて、しかも大に本家の爲めに備えつゝあるものである。そして此の日記と云ふ記憶の藏のなかに無限の夢と希望と喜怒哀樂との裏書きをおさめて置くことが結局は吾々の生命の意義であると云へる。あらゆる生物のなかで日記をつけるものは人間だけと云ふ事實は、之れを物語らないで何を物語り得やうか。

病床日記

九月九日晴
朝　便通及體帶　葱ノ味噌和　白瓜　來ワロシ便膿ニ栗ワ
　栗小豆飯　ノ漬物　梨一ツ　ロケレバ其年ハ豐作
又一ツ　氷水一杯　ナリト果シテ然リ云
夕　小豆粥三碗　鰯　々栗ノ袋ノ中ヨリ將
　鳴　壺ノサシミノ　菜ノ駒一ツ出ヅ
　殘リ　和布煮栗　新厝重陽
　三碗（新厝重陽）佃煮　栗飯ヤ絲瓜ノ花ノ
問食　紅茶一　黄ナルアリ
　杯半（牛乳　栗飯ノ四碗ト書キ
來ラズ）菓子パン　シ日記カナ
三個　便通アリ　（正岡子規）
午　栗飯ノ粥四碗
　マグロノサシミ

○十二月十九日の条に教業中文行者に於て聴聞する所なり、家原文書一帖列公書簡三通桂園四宮歌会和歌二首家原の文書に天正　年の紙背かきそんじたる家花三家原を開くかゆえ之を綴り桂園の書に極めて稀数に属す、北郭南角の汚あるも珍とすべき迹なり、洞仙歌の「徒往開来」の四字を書す、三笠の内なる珠とすべき列公武田信玄の書を共ふる書簡（桂園）を共ふる書簡を（桂園）て文亮に四海を列公和如し兆を乱のるも献上に及びしを喜び歓躍いとしとあり、なるる徒るかとなり〜しかも武器をあらそんが氣を入るまいと、正家の一刀を共へふる、なるべく抜化をうる

榛原製

打んるまも和合の〜勝利必ずとあるも、一首の和歌を知しなり

清の風のよるあしの名ハかたるも
世に北つるき二ツあらめや

列公の書簡ハ、ある人孫花まるる也

○事が恵業に新宮の朝市を詠ずれ田中小稲の作なる和文の紙を引きなり、方言を多く文を綴りなるがおもしろく感ぜられる故也、勿論方言を注を施さいんが読者い難し難きもの（つき抜）

注もかくなり。今俗と風宮俗の南江者（苦紙を漢ずる小稲の脱文を詠しなる　和長歌

あり、たゞ祠しも矢壁に供す、

船はたゝ、碇るきこむ人の音の、九つぬんの鐘鳴いし

く、花ちる〳〵庭をはく花の、さきの盛りのお供

飛び、花の面わに白ぬの、たゝ一ちい附けも紅の、

赤堂祇しき家毎に、四人立人軒毎に、六人七ちり

性せの、影につらるゝ矢壁の、西き支ち人の

手をとりて、袂ひつぱり宮ちゝや、遊びちん

やと義波の、まつはり背けば、八宮軒毛、ひかく

ち人も喜めしき、ちそひい捨て、腰の毛の、ぼ江し

荒男も荒くんし、心ちゝめて引く袖も、はちち

もやらぬ、縋る手を、拂ひも得ぬ男の、や

さかれ伸ばし、玉垂の、延れ一垂んちきこちす、

樣原製

ちゝけやゝちゝか俱衆が一ちん拂つ花の姿に

白魚ちすちの指さきに俱衆の

人をいくちもあやつりぬちん

北の沙歌和市を沙すちの駿〳〵頻る方ちを見

あもーめーし方言ちてちしく、もーめーく男性の

下方ちの枕も指めてちし、北陸ちすちの孤を見

んが男性のちゝ〳〵に駆いしく、えやんぶも、北の巷の

男性小船の祝也、沙中の俱衆とちの男性を

ちの方ちを也、北巷ちと上大川前三四番所の方ちを

を殿屋小路とちゝ、城ち沙ちを下等の男衣

軒を連ね、ちゝ、えを殿奉ち路と称ーちゝ、

船舶位清ちの潮つを帆を巻ー四千ち銭鉛を

御しも此花と云ふ。日ぶを例とし居り、タウボン高し
碇をふこ投しも此るふ霧を云ふ今い此の花掛
ゞ市の此端を立す。

○都合さん清霧ふある殊こ二葉此の都合多いのハ
烟突がきくしも煤烟を吐くから此煤烟い温氣を呼ぶ
ことあつかく、其氣を抜ふの温氣がうくうる煤烟
ふふ蓋化の燃料を惹き起すの故世界い清霧ゞ
有名なのハロンドンも清霧の発生未い一年を六十
一日あると云ふから二ヶ月ハ殆に昼ハ暗いことあるる。
此の高あるロンドンが受ける損害ハ五百萬弗内外の
外と云はれてある。清霧の災害ハ船舶ふ大な
るい、其こ陸ゞ研究が始まつて、霧を征服す

榛原製

ることが漸ゞ二風さん此。其ハ飛行機が試みて其
行し此のであるゞ。どうすることと云ふと雲流と言ふ此物
を霧の流こうませいやする放射した雲一番ミニ千
呎の高雲でもるる成功して清霧ハ忽ちる散した。
亦モー一つの試しハ地上のプロペラ状のものを据付
け、そこから雲霧を吹出して高雲と同じ氣を高雲と同
じ氣射しも見此ハ成功しなと云ふ此
の試験を御すること云ふ清霧ハ不一の抵力ハ高い。
ロンドンこの損害を御すること。おのつかく方法があ
る譯此此考の高雲ハ高い、ロンドンの清霧を掃
ある一分間に一千ポンドの費を要射すること
の出来る飛行機を要すると云ふてある。

○余印図の石人うしたゝの雅弾を以て俗称を以てする
ものあり俗称を以て雅弾を以てするものあり、而印
貴を以てするものあり、俗と舟江貴芳郎を挙げ以上
の新しき如きを知り得べきものなり、**吳雪樵**と云ふもの
余が家に寄して殺す、北人佐吉北訂の子なり、北訂は元
敬の子なり渡辺の孫也、雪樵の印皆吾家に倣いる、北
貴と云ふ別称あり、而して其俗称を以て家その
儀義と称せしこと舟江貴芳郎に因て初めて知る
也、大倉幻村は佐藤人自ることを以て居るが新
潟の人なることを以て得べし。北人の家
は貴を基とし以前の東印度の九番所に生る、故称也
知らざるしが謹者と云ふ。其父は良庵なり、余が家

榛原製

は北人の遠祖にして荒平なり、中ゝ除三家此の印二三なり
反称の在りし時疫なりこゝ、俗なる義なるの事跡は略
さ以て敢て記するを一家なるを也、田田旭堂は佐渡
一の一家刺家なるを以て人を以て貴芳郎と
称せしなり、家業は田形河屋を弾雅斎と
云ふ、其先は前を来りしが如し、坂内は故の
北角本町を上大川前を貴く地域は其の遺墨
なりとなり。余が印里は原なれ無為寺と云ふ寺院なり
俗為家の遠主なる所なるを以て尊つて徳龍なり天才傑居士
の、事の知り所いこれなり、今遺芳郎を集するに、新潟
の順崇なる者俗なり、即潟寺の住職牧浦氏の次男
なり、俗為伊左衛門の弟なり徳に感しあいまする者の

を以て す、こんらと共、常陸二十四輩の一人無為信法師(憲)
化して奥州会津郡大寺の無為信寺 寛鏡と云ふ、什
寶納めを本山に存ずしを佐渡民共云へども、一寺跡を留
れ、本山に帰ふ共什寶を譲り受け其の改り無為信
寺の称を設れ、順宗を以て其住持となる 実に鏡
厚なる也、順宗跡に始まる、その子に頂宗徳新の
ゐい偏れのあるべず徳新の子 香達定行忠も亦宗門
を以て今存あり。各氏壇減して既に忘れ而して幸等
の記録を存せざるを得ざるものゆ 塚井良仙と云、北人新
潟に流浪和を起し信濃和の人を亦宗門を創刊したる人
なり、流浪不い塚井流浪不うて帰るの北溪行なるなり、北人亦
横田英世 (初代住職)と学校を設け人を遠諏し

横原製

観光銀の再興をなし、我が宗門の発展に尽くす事が二百代なる
新潟県の教の前身に、北等寺業に表示因縁なきあ
ると雖、良仙の新潟の医 長崎の与男をして北渡と云
す所謂の南時の新人を早く民衆を惑ふ後司法官と
なる各載利不に歴任す、余等の人を知らざれども名は
記憶せざる可からず。新潟の醫に鈴木順丈と云ふあり、余
が母方再三氏の記載する而して先人妻腹の子なり余新
潟に立ちのぶの日おもむく訪ふ、主人は仏法の人を訪ふの如
き物なりとす、余の家と北人の交誼を厚し、鄭氏
柳と云ふ、遠芳原の柳の樹の鄭あり、亦吟舟
柳の鄭に寺門静 柳の命 思ふる所と云ふ、鄭新
亦東京に住て後も交りしこと後新に就て知らず。

○此の手まめんれ塗金の大銅印ハ印面まで塗金してある
えんて就て書元雪舟ものと錯金家の考行してもある雅俗
なのかしたるまた左の如き記事がある、参考まで記して
おく

銅印の印面を鍍金してあるハ、副葬品故なりとの
石村浜氏説、又或人の説なる銅印の印面を鍍金あ
つて、捺すことの出来ぬ印ハ、墓前の印面ハ
りといくり。此の塗金の文字の所の金が脱出し
て捺せるものもあるため、六角長方人曰、元来鍍
金の術ハ仏教と共に伝りたるべけんハ
うの印ハ後漢ものも以後のものといいたい。

○雪ハ六方晶系に属すと云て云ハ定説となつてゐる

が、えんの説を據つて研究さんれ度思ひあるか

○雪が結晶形を持つてゐるの氣付いたのハ西
暦千五百五十五年ひろ其の人ハ大ウエーデン
の僧侶オラウス、マグヌス氏がありた。

○此い結晶形をくといふ拡張をぬとも研究し其
の六方晶系を属することを確かめたのハ有名な
天文学者ケープラー其人がありた。

○拡えて千八百九十年代の初め獨逸の氣象学者
長ばつとへルマン氏ハ雪の結晶形に新い
て研究し通と千八百九十三年の初めに公表し
たのが「雪の結晶」と題する一書冊である。是れ
雪が鍍板の上から考へ雨に研究さんれたもの

嗚呼矢である。

○次いで米人ペントレー氏も自身研究して前者を傷つけることなく「水」即ち雪の形の二万五千五種あることを発見つけられ

そして今の方法踏襲しもある

こんな納富市雄の著「水」の内の出るに、日本の花炭に若干志をられ雪の形を研究した以人があつたを

の名は高橋が、その人の脱するに雪形の譜があるあ

れるとも自分のペントレーの研究、因る様つたことを思

ひるが今は手元の譜がないから、且つ格を存しな

おく。

標原製

先頃獲た船の模型を見て描かしめこゝに収む。
序でに写真を掲ぐ。南洋の果実を材として雕刻三ツを彫刻したるものなれども時代あり刻も
らし、果実の名は未だ詳かならざれども堅硬なるもの
赤味を帯び光沢あり、底に象牙の板を嵌す、果
実は象牙と見る。他の一品は印籠の蓋の面に（大きさ根付のごとし）
を桐板に嵌し俗馬鹿とでもいふべきもの心れなるの板
板あり、板の左右に書あり風集の流井八年寅次
乙亥六月十蔚住日」印工高平綱二生之」郷体の
書体なり。他の一は走馬燈に擬したる香合にて楽
と共し、花を散らし美人の絵あり、上部のあらさまと

十二月廿一日記

小丈形を取る也
○何の文句なるか衛生上注意が拙い洋服が何方
必要なりと云ふを上衣道が低き者なるか、下衣者道ハいつも
云ふこゝは出来ぬ。何から上衣者が出来ても悪敷の
変なのなつた例は少なくない。英吉利ひも工レラの塔高
く廻るものと下衣者の低きをやり北路ひは世界
第一と云ふのもある。日本ひは上衣者は古く徳川初期
○ら行のものをあるこんは信濃ひ世界に誇つてもよいこ
とである。今は新式の上衣者も出来ぬ下衣者
の注意は市高者も頭を廻すもみたくなく
容易な事ハ日本者と下衣者を作るの困難
な都市はなく。この譯は如何なる事か此事なるいとも

兄越堂

尾竹竹坡

兄は一面から落放縦の樣であつたが中々きちやう面の性格の持主で、幼少の折にはよく戒められたものだ、他人の遊ぶ時に遊ぶのはたゞの人だ他人の遊ぶ時に勉强しなくてはならぬと。兄は十八歳のとき無斷で出京した目的は月岡芳年に師事するはずの所、何かの都合で梅堂國政の門人となり、一日僅か十錢の手當で衣食しけい雪の苦學を積んだといつて、當時の苦しかつたことを話して後進を刺激したものである。

○

勉强時代、徴兵檢査で歸鄉したが結局身體が大きすぎるので不合格となり、鄉里の新潟新聞に聘せられ、さし繪を擔當し青年畫家として既に名聲を博し「國一」の雅號で賣りだしたものだ。止まること一年、再び勉强のために上京しようと當時交通の不便な旅行を續け船で新潟から直江津港へくる途中波浪高くして寄港の見込なく、そのまゝ隣縣富山東岩瀬港に上陸した。これ幸ひと富山市に行脚した所富山日報に懇請せられたので、斬新なる筆致を以てさし繪を揮がうし、傍ら團扇繪等に新機軸をだし好評を傳したものである、これが緣因となつて數年間富山に滯留し、同地で妻帶する事になつた

○

後大阪に出で商工業の盛んなるを見て發奮したものか、一時繪筆を捨てゝ印刷會社の圖案部長となり印刷事業の改善に努力せし時代もあり、當時伊藤博文公が韓國統監として李王殿下のお伴をして上京の途次舞子で御前揮がうの光榮に浴した「越堂」の號はその時伊藤公より贈られたものである美術家としての立場以外他方面にも相當の趣味を有し、一度案を打つときは何事をも放てきして顧みず奔走したもので、日清戰爭當時には國民一錢貯金による戰艦建造說を持ち回りて世間を騷かしたこともあり、すこぶる奇行に富んでゐたことは知己友人間に著名で、富士山にしめなはを張つて外人觀光の繁榮を招來せんとした如き、又さきに多摩墓地を創造して天下の一大墓地となさんとしたる計畫の如き、すこぶる妙といはねばならぬ、かうした兄の言行は唯今さら多忘混雜の際一々枚擧することが出來ぬが、要するに兄は悟り切れざる悟りを能く道破して居たやうである。死去した三日の朝偶然病床を訪問して握手して歸宅すると間もなく悲しい知らせを聞いた次第である。

二人共畫を書き、又らくも画才があつた。四雪が市山
翁にみた縁因も、日翁の政友島田蓬之がある時東京
で余を訪ひ来り、佛役回觀に出年少なれど画才が
あつ、保し当時もが無いからと、教育する必要がある、
どうか古人の内とんでも一人貴君の世話で学問をさせ
て貰ひたいと頼まれた。自分も深しれが其の頃古人共
雑誌の挿絵をも書き或俗こい遣銭が取れた
のと、四雪くとれば学問をすることを好まるい為め、遂に世
話も出来ようのだが、又才三人共自分に縁因がある。
佛役回觀に見られも名をなしたが、惜しいことは事
業を欲いた。四雪るる趣味高い拙の好人物で大
坂二回自分の出張中来て自書の内

橋原製

某文化を自慢されることがある。毎月一二度遇つた
ことがある。

○今○(十二月廿三日)文行堂に同書を渡す為千の反故を
清ゆ、皆る必要有文献に関する文書を当時に事関係
が如何なる人之為を徴するも先ず面白き為と為しで
の面美の情を(を)を為る印鑑を関係の役人を
要衛と異ひ、又を只今を、正しきあと又人物を面
行をしめるこのよう、北野の文献に全の説と集め
なるものもあれど、その得ゆい世変転の大特府
本山墨北陸当(陸奥)陸奥の文献も、全の印鑑に関す
るものあり、伝説を漢するものもあて時代に新らしい
が自分を無味があるが、買ひ求めて古文書の内を

必ず置くことなり

北の書類いまだ中山道坂本宿より
大軍を以薩州義を唱ひ公帰隊し
印旋の外を先鋒仕候旨薩摩川村與三
郎が人馬賃使の書状あり又同じく大軍先鋒
薩州山下次郎の書状あり
京府の印旋ある
北陸道督府
越後駅逓方　八月
民政局　公六月十九日
神奈川裁判所
同別局出張印旋

北陸道分局
京都伺所印旋
佐渡国の印旋
大尾国
中岩平四郎
杉浦兵衛
杉村郡作
荒木市左衛
渋川主殿
松平兵庫頭
北等の諸藩中より都品仕馬守役和の印旋
二月（慶応二年）松平定敬撰の関書が貸渡

印幾号、文政孝義為替の印紙、北の二二
條御所の印紙木札に深く存ず印紙、大阪代
の江州、懐奥州の郷の印紙、印の
体別時代時代こゝに同しかるべし、信州二十六通あ
り、一通に御りと交通文書とこゝ　十二月廿三日記
○谷村一大さ印が京都より寄せ来り書信の内に
左のごとき記事あり、太田方の輝山子翼義、移転の
消息を知る一端として先に掲ぐ
本日新村出氏と今浜氏を訪ひ、京口人先代備州福
山市へ参り同市図書館を訪ひ、初代和親
を得た侯の大田先生の輝山子と二郎和
義移転の事を聞き、一郎の命事

榛原製

出入本を校正を施し、
越、一本は紫苑のごとく不調の献上本なり、原紙
に紙子表紙を用ひたるもの、
玉名文庫
がとうして福山に悪く具備せしなく故に
能はざるは遺憾の事なり、来歴を知る
法と存ずるも遺憾なり、但し而して
新先生遺稿松本なる一部貴家に二部
福山に二部の存在を知ることを以て
岸田氏に一部方面東大なる蒲池氏の
このあるべきを要望の旨を以て、
会ひしこと
十二月廿四日

○高神田の村口書庫に一二の図書を得たり中に俳
書一冊俳諧柏崎の八景を題する句集歌の
稿本にて序の始にこれあるを写きしも手を入るゝ処
なく窮屈なる言葉の序あり柏崎郡第一と云
ふ所なるを也此人の句も多く見る所所謂る柏崎
八景とこそ。柳橋雨、鏡沖秋月、采松晴、下
見帰帆、米山時雨、星崎暮雪、中
濱夜雨、これ也此人の四季の句も多く収む城八
の余の花書中此者無きのみならず也（俳世五四）
芭蕉翁手鑑七冊元禄三年に越石の
初鏡拝しなりまるそ巻尾に蕉翁の手書
柿舎の記を附す。石の印の如き柿舎の後主也

芭蕉翁歌のつゞれとしてはいとさゝやかの也元禄方
図に出さりしまの也他の一は果物帳也俗文
多く頗る古雅也元禄は前のものなること整を家
元す常に余が蕉翁を尊
ぶくる此者は余の花の印あるそ
と云ふ（俳三十四）

十二月朱四日記

此日午後赤文四郎に一二の図書を得たり一冊
物語二冊挿画入小説なり著者は教的
南北橋後夢なり此人は稀小説家にて
四方側判者也心ある物語なり書稿の方のこ
とを考証するものの如く小説目録なるに年表
まい全く漏れ長るものなり

此西海詩鈔四冊合一本 陶中五路小四郎氏
若き日也 氏は頼山陽と交ありし、詩に多く
山陽等に頼門流の雅趣を得たるものなり
なり、主の門流に関する此方なれども、山陽に
取味を要つこと多きを之れを参照せざるべからず
又は、北方何れの方面に出ること罕なれども余の
架中元あるい今回も此の如き始とす、北集山陽
の長序あり、磐谷山陽の評多し、第七
冊を得たるを深く喜ぶ 十二月廿四日夜
北詩鈔は第山香妹等の評あり 陶平凡谷氏
とすれども山陽の評時に熱あり、余山陽の評
詩鈔を愛する所以は山陽の評なる故

榛原製

なり、何人の評も皆なる死人でありひとり山陽の
みは生きてゐる、此西海詩鈔を読んでの感
想なり。

話頭事記録作業者影行紙表に代へる左の如きなり
○録作業者の出所を会せる人多くあるべき書と就て
其比其の人多くあるべき書と就も自分の高見を問ふ
比。先づ其の冊数を問ふ十二冊と云ふ日出
家成功まで心更に続て自分を慰む心業比と云ふ。依つ
て自分の考へは録作者と海つもの図書は大部分
云へば汗牛充棟書なるものがあるも書名の数若し
あつて根本図書とも見るべきものの内の大部のものが
少なくなる。若し此等の物を収めるとなると、立て

十二冊い充ちた仕業ぶ式が収めはのるいうもなんぬ。若し
無差別に此等の図書を採ることすんば何も面倒はないの
であるが、然う無雑作に千二冊を充たすことは面白うない。
根本図書は大切な相違あるが、それが見るべきも現代
の人は珍重からるものばかりである。中には死書もある。特
殊の研究家は此上なき好資料で大切な文献である
ことも、通常人には一向興味もなく理解さんるひしものも
ある。単に古書を保存するのを目的とするのならば、
取捨何もかも取り入るべきもあるが、現代人に役立たせること
が目的の一つであるならば心どうしても考量を要する。普
通業者を化するに時代順に根本図書（その時代の大部分）を先づ取り入れて次に零碎のものを

榛原製

零碎のものを及ぼすが例とすることもあるが、此は時代の差はあるも
や零碎のものを入れ此編を通じて通ずる自然後に通ずる通ずる
或は後に通ずる通ずる常套であるが、その常套を倣
ふことは恐らく現代の趣味の投ずる作者出版社者
も難きを感ずるものである。何人とても公衆向とす
るの時代の較べ差かの各人にあるの文海がなく後人に
興味を感じ通ずるやうなものを出すやうなものを顧倒して果が正常を収め
ば、読者が得難いばかりである。なほ書籍を収めるにいく
ら業者でも雑然たる図書の掃き寄せでもあるとは
合ひ難理解さんるやうなるやうに収めるから、此云味の

複原製

於て根本図書も採るべきものがあるべしと雖、而成大部のものを解
けて簡略のものを取り出へ。紙作百日物の大体を就ての
図書は大略十二冊の半ばを充てる位が適度ひあらう。
他の六冊は地誌、寺社、風俗習慣、人物、文
芸、風土養生等多般の事に渉り、紙作の特徴を発
揮するを力めねばならぬ。こゝに注意すべきものこそ
多い自然零碎の経籍も交ぜいるべきか、編者い
此の六冊を最も力を注がねばならぬ。大部の著
名の図書は図書館其他と保存されもするが、零碎
のものは之を拘束する便利があるとも迫る亡び
もし忘れんとするも一部つゝあるべし。此等は此の貴重中の
収めらるべき性質のものである。年代

ハいのまゝを経界とするかと云へば。内流の中流まで
下しても よかろう。維新後紙作いろいろの変遷
もあるも文献も少きものが、今日の場合等は
大部類と入るべきものである。上木された図書ひも流
布の基礎あるものは取り出へ。特に新紙編纂する
ことはやりたくないが、或る成書らしい書の京を
ことは差支ひあるまい。例へば武内式部の事歴のこ
どき其の碑文は碑文集の中に収めるとしたい。亦人物像
らも武部の傳を元にもよからう。紙後の傳り
とするものは可成簡略にしたくない。
洋学者傳
得る用理三位や平賀鳩渓の肖像を載せる此里四方物の
火浣布の説などの類がいくつもある。稀獣

の書は一の成り入れたい、例へば寿永記の相違は系の
如きは伝書と寿永記家とも今は無いようである。四の流に入
つたかも稗史のようが出版されても今見ると四今芳の感
を伴うものがあるが、それ等は一々指摘する暇がない。
要するに紙伝の業者と数あべき四まで概ね徳川幕
を出でない。是れ以前のような故方物語屋の紙伝者
料を纏めたものであるから、此の業者は志料徳川幕と
負如の如し此時期を編纂紙く故の向が此出版的に成した意
義がある。終りに臨んで高一言を要するいとうセ十二
冊の業者と約め言換する紙伝の同者へ少かりきめ
るから、その目録とその解説を附した。是を巻末
に収めて置きたい。一の成り其の同者の所在判る限り

榛原製

記して置きたい。
○余は曾て前の所説を後の山陽の系説
に特に改を感ずることと改と前と海べ今人今を
の一二を左に掲ぐ

十二月廿六日記

○司馬江漢の西遊旅譚の初版は久能山の図あり、他の版もこれを略されたれど、前の一頁の言葉三四行取つて、自白を埋め、下付け一ノ二と云ふ如く繰りあてあり、えハ徳川家に素遠しとの或の明言を命ぜられうる後ん後来余の見るものは絶て此図あることなし

○若し特殊なる本一見度即ち、敢て意を深くせもあらんか、お名梁の本を求め始めて余が海内の古拙稿会報(大本)一枚板刷なりと価廉なるかを嘗め、無疑えバ今七十四の市価を求めと云ふ他と元禄四年版の聖堂の図を始めとせん

臺座あるものなり、義あるものなり、図の上頭に孔子并に門弟子の像あり、えんを大成殿を始め中食の図入徳門下の右側に講釈の場あり、と見る、門を入て左側と書所あり、後年と異なる所多し、えも無疑の事なり、今は極めて古拙也

○堀口の疑山が訪ねて未て二巻の時経を示しと永徳の年間が墨也もあるる。再渡の大乗寺の四巻で、あるる。此の寺は伝へ云ふ度者寺と云ふんを聞く、此経を社て拝ましく感ずるのは、南北朝時代のものなるの元、版の普部を仏像の陰刻如あり、快を具し比類新なるもの、素朴なる雅なるもの、金紙泥の装飾があるる、訪のあきらかなる北の時

代のまとも孫くく思ふに
鷲山の流しの佛像を模写する秘法があると云
ふに、薄き紙（透き通る薄い紙）を原書の上の
載せ、スキ写しをすることが例だが、厚き紙を載
せて映写する場合もあるが、紙に丁子油を塗ると、
なか透明のようになって、完全な紙の全部を塗ると、ハシから乾くから、部分
的に塗って、映写が済むと、他の部分を塗る。
○裏に丁子油の丁子から出来てゐるので
香氣もあり、佛具に用ゐる唐いしいことは
いうまでもなく、ちょうど松脂のようなもの
等のこんまり丁子油は刀剣の錆を防ぐ料に

模原制

使用する。用金を
ともに用を為すものである。
○北頃こんまで知られる文献志料が一巻出て
来た。それは薬師の勝福寺の載せてあるもの
で、これは書かれたもの
で、早くこの寺から他に移って行ったもの
である。物字敬が後墨で北陸道百六
枝寺と比較して、どうしても分からないとある。全く
こんまで所道の人の目に触れなかったもので、裏に天平
時代の書かれたものの裏に書いてある。古印が二個
捺してあることから、見合わせて写真を作ることが出来

えら機会もあるであろう。

○柿（四月号）なる短冊三枚、彩色の二枚まで自
画で地紋が入つてゐるので殊に珍しい。例の柿の
枝をよめし短冊なり

冬隣えとかへの柿のもぎてさよ

他の一枚に彦根城を先年泊りし時の句がある
箱の短冊に義弟の句一枚がある

彦根城

畫くつ絵き城山登る義弟かな

他の一枚まに和歌がある

たき友とあるしに泊るとこのみとハ
如のしとにおもふ柿見けりかな

○三枚共明石が名古屋で支店を出した例のデパー
トで計画をえた折柄目下貴の地を始め拙生
が後援者支線と終つた。貴説は名古屋なる松阪屋
のデパートがあり、松阪屋の地の商家である。その
向かを張ることの不堪思ひ
ひもあるまいが何とぞ八幡の皆いたのとと
ことである。京都の祇園大丸ひむらくらの
地に根を張つた老舗の共立地と勢力があるの
ハ貴兄でも、強結がいくらあるかもの
あるまい。先年松阪屋を今帰りとして訪ねの物
産を陳列した時、松阪屋主人は城後の花下
の輪廻家を訪れ歓待の宴を張つたことを覚

主人が特に客の席を列したのは、自分は城後の縁
因があるとのことで、其の客席をもくとと、若し分儀く城
主の城後を下つて結を仕へんの時、旅中護衛
かつき、威儀つて上下しいとのことと、少くが初
再び会ひ、長寿を保てば喜ぶの幸運も来るものである大
人間の長寿の政治生活の陰今もいつまでもあるとも、首相
なるとこと、と云ふて別れた。
なお、政治家の統制とそのうちに
来るの氣がしたと、況んや首相の大命を拝する
といふ等は意味深長なるものであつた。

榛原製

なる流儀をもつて時代、自分はめる威厳がかしこ。ちん
る罪を責とそつたら、閣僚を宮内省を
みをうるとのことの政治家とのいくら年
が先生、助の無根性が消んでみることをくることと、
文人同士語つたことがあつた。政友会の枢要
こんまで隠忍、抜ひとの内々してみたらのだかとか
回いう会で、牡丹の鉢かく選ばれやう
し大命があの人を下ることとなること、即刻強く
なつて、協力内閣の内閣湯もいはてル切りかくの顔
で押し通してみる。人間の心理必用はめるがうの
ある。藝ひつけんべどんなる人物なること今更
ろうと痛感した。

尊朝法親王墨蹟軸物

——解説——

慈恵大師七猿和歌

つくづくとうきよの中をおもふには
ましらさるこそまさる成けれ
見きりてもいはでもかなはさる物を
うき世中にましるならひは
つれもなくいとはさるこそうかりけれ
定なきよを夢と見なから
何こともみれはこそけにむつかしや
見さるにまさることはあらしな
開はこそ望もおこれはらもたて
きかさるこそけにまさるなりけれ
心にはなにはの事をおもふとも
人のあしきをいはさるそよき
みすきかすいはさる三の猿よりも
おもはさるこそまさるなりけれ

○日本人ハ先年干支ヲ迷信セカラ戊午ノ年ハ厄年ト云フ不幸ヒモアルカラ御ヒトツ七猿ヲ思ヒ出シテ見ルモノ

榛原製

もあるが、先ずこうもどうもと、秋市の金が出ると云くんだが、借金が出ると解すんだ。幸せいるのか。年を迎へ[illegible]年等ハ[illegible]春四雅を持ち込んだ方がよろしとして祝福セネバならぬと思ふ。先年中ハ教訓ヲ多く出し和の教訓を見て、皆様ハ慈恵大師の七猿の教訓を受くべき大切な年と考へられる。

○暦ハ市川団十郎家十八番の一ツ、矢根五郎が大きな弓矢ハ根を磨ぐのが第一番向ものがあるが、元が正月狂言ハ多く演セラレ、謡ハ、昔ハ団十郎が[illegible]慈恵大師ノ七猿ノ年頃ハ出ようけれども[illegible]

内ハ仕事ぶりを礼装して素敵な大きな矢の根を
磨石に当てゝみるのを見た。見ると勇壮な
るの外、満面ハ四十の外、えを無台にやつて見たら
人氣を投義してよふらうとゝふので「斬」を工風
しようとゝふことを何か張んれることがある。その著
んの市術を教業して、紅毫の色彩を立てゝ
ゐ似合のものがあるのんの目氣かけいた。見ハ「斬」
の絵着版をかさく題板具板を作りたるの刷
時の前に置くやうな風根があり、松井桜ゝが
着版の左右にあしらうんとあるも桜ちる
出来てみる、高さハ僅かに五六寸のものでがうる目
のある相撲に入つてあるから、小品第中のよ

榛原製

ゝしてもめさハしいと、四十ちの劇毫ゝを思
ハ合ハたる巻の四物として持ゝて
○御墨の新年が新年の初刊に載せたいとあつて
欲面の揮毫を求めを来たから、張騰刷目の
四字を書いたやつた。張騰的目ハ成程ひあるが
刷目としてあるが張ゝ文こえ、今の人に分し易いと
思つて、ひざと刷目ゝ刷した。来年ハ高の張騰刷目の
年である。四雅の表面ハ一ゝ年ひある政府が実
外変つて見がどんなことをやるか、共ゝ張騰
と監視を要するから、新ゝふさゝしいと思ふ
て此の四字を送る人ゝ
○一年の清算期除夜ゝ万事のことを片付け

筆のまに。不篤業務者の時うそうそ、幸ひに自分のうそ
板面の困難もなく活字を作り、活字の中すくな
七十二カ字を完了したことも多い。例として一年の末は日誌
の原稿を精密を低さが、そんこに伝ると本年ハうそうあり
ぬ、隠分探すべきことが多つた。生甲斐があつた。
みあてよいるこの雑誌(自嘆や録)が僅かに一年七冊を経
すまう迄うそうこのハ春城浸法の稿を準備する迄つて
執筆し多く時間を費し[illegible]執筆の時間を
殺いだこうもある。明和の時刻が来たこうそうそれ本
年の筆を閉ぢ

明和六年 除夜

以下昭和七年一月後の筆録と係る

文字を一つ一つ書いて、それを一つ一つ彫つて版をすることハ
いと煩はしい。一つ書いた文字を彫つて、それを個性の字と組
合ハせんハどんな言葉でもうそうそ、[illegible]をいろいろ組合
ることも出来るやうなしくみが活字である。活字活版の誰んが命じた名びあるか今それを字
数金すうそう及ぶうそうハが、活の字ハ置場が出来び、数正版
のやうな字が困着しうそうハかうこ風さそこのびあらうう
かあ弘之さんうそうハ活版の便利を喜んでよいが減る
未定稿を印刷所へ廻へしん、一旦組まもそかうら実行
く直して組直さもそ大いに印刷所を困しめたのび
有名ものが印刷所も世界を[illegible]活版の妙ハ
勝手を直しが利くこもそうのかとこつとあるが成る

程考へられることだ。確かに活字の
動の働きがある。動の働きがあるから置換も出来るのだ
が、置換が出来るばかりが活字の活でなく、モット広い
上の活がある様な思はれる。唯単に機械的の働きをも
すると止まらず、四方へ言ひ過ぎるかも知れないが、霊的
がある魂がある様に思はれる。
凡を死の世の中に活字の支配を受けるものがあるばかりか、
文化の世の中に活字を離れて生活が出来るのと
云ひ得やうの活字は人を喜ばしたり怒らしたり哀しま
したり楽ませたりする。また動もすると人を殺したり
生かしたりもする。世の中に偉い人とは多く活字を
使ひ組まれた人である。若人でも偉いものとなる。同じ

く活字の活字の活用する人である。世を導く人は多くの場
合活字を使用する人である。大なる著述家
などがその一例である。
文化の程度は活字の運用と比例することであつて、第運
用が多数であるに随つて活字の形が益々小さくなる
傾向がある。かう文化の程度に活字の大小
を依つて知ることである。日本の活版の創始
は慶長の頃であつて大形であつて初号二号四号
と活字が大きくなり、高橋さんの印刷の時代もあつた。追々
は活版の進歩である。今の新聞紙の一頁は昔の新聞
紙の四頁も近敵する。活字の働きが繁劇と

まつれ、まんがやがて文化に貢献するものである。活字の進歩とともに、多くの思想を固定し、現はす為めの必要から起るのであるが、愛に先づも高度に大切なことは、活字を組んだ印刷物のサルキュレーション（流布）である。広く流布されんとするには文化の神経に資することが大きい。乃ち大量生産は文化に最も大切である。㊀今から三十年程前まで新聞紙は十萬位出すのが一番多かつたやうに見へるが今は百萬を発行するものがあり、雑誌でも百萬以上を発行するものが一二は止まらない。此等大量発行する上り活字が其の働きを為す場合大いに効力を発揮する。㊁ひらがなを一本の活字㊂の働きが百倍あるのと、斯く活字を敏速に働かせるのは、高速度の輪転機と伴なふて、勿論其効力を多とすべきものであるが、何人と雖も文字が中枢で、他いろんを運用する方便に過ぎない。大量出版は社会に大なる勢力を有するものであるから、その出版者は責任の大なることを思はねばならぬ。今や活版の程度は伴つてゐるもの、一切を一新徒が一千萬する迄する将来がありとすると、恐らく世の中の思想は全然其支配下に立㊃つてあらう。実に偉るべき勢力であるが、本つく所は動く活字の組合せに過ぎないのである。

自分が活字を解して動く機械とのみ考へず、霊なる魂ありと為す所以がここにある。文字の勿論霊なり魂もあるが活字として㊄活躍するので、恰天動地

の働きが因起するのである。流宮流派の名を命じた人いらも
や今日の如き大なる働きをすることの思いもよらぬことが
今となっては実に恐ろしいものとなってきた。私が流宮の家
まう現あると云ふの消息に附合のできるのだ。
自分は常々思つてゐることだが、何う然うべき機会がな
つたら流宮祭をやりたいと、自分は流派を営業とし
みるかく新く言ふのである。苟くも文化に浴するもの
は何人と雖も流宮のお蔭を受けないものはない。
流宮祭りは因縁の深い彼の春日祭に倣ひ彼の例合祭
と思ふ

昭和七年元日筆化
り旅行初刊を稿を求めて
行す

原製

のことしの御歌が暁鶏であることを因人で鶏冠を盛
りたのが一寸思ひつきと思つたが、路を等る鶏の鳴
へれ美に元朝であるとが、汐やんで云ると大阪の中繼であ
つたる。毎年のいろくの後向は初日の御歌に因むか干
支を因む外を出ない、俗をこうきもいろく輪轉した
が一向感んしまるものがない。岩谷小波のはう
きゝは御歌の句がある「一鶏に萬鶏の和す春雨
うるあ」こんなのは較の吟すると迫る、平沢淑郎の
春うきゝは鳥が知れぬ「晨鶏鳴に報新
年」仰見九重祥雲連「思」「鶏」「思」「鶏」
士、湯芦風雪新集天」今くの同感である。いつ
も東都の大丸の主人下村西次郎の年賀状すら

お寺の表近くがある。左斜の八去四條の西いと油絵カニ
チチンジヤンガの初夫で遠山の日が映じてゐる図が、
干支や御題を拘泥しない意匠が新しく感ずる。
猿などは図にして見ると俗う無味が無い。ゆるの雅版
刷平のはがきは長井雪坪の紅葉戦猿が図にして
あるが、雪坪が紙絵の名人だけに巧みにうつてゐる
が、もつと遠図にして中に因むが切つて味がある。
梅風が書いた寧楽の猿沢の池の図もいい中に
因んで雅版がある。大てい人のはがきは自家宣伝で、自分
の顔や家族の写真をあらはすのが多い。
まぐれ記しみがあるが、同じ自分の顔をあらはすにしても
衆議院の議席を就てゐるのも御丁寧な池の図

くの撮失まで守りはがとしてゐるが、自分が議失だと
を去人でのるさまが宣伝かりんで何とうくおぼえがれんるやう
な寓意が、芳が大阪遠出のはがきの表面である。同じ
大阪の宇津保文庫の人の絵たこうきうの申に因む
黄表紙が図さんでゐる、文庫の表近が寄稿あること
とは常套だが、黄表紙を見ると「新撰小判職」で俗
るは猿と猿廻しがあつて、猿の面が小判とうつてゐる。
角浪兼は黄金で無の庭が作りの。同じ浪兼の
人が、加賀豊三郎は一幅の複製物を寄せた未
だが田芳は芳春の青いと猿の図に大納言資愛
が酒白一杯に人間万事西行と一行の書き猫
の字を書く代りに図を利かしてある。えい亦偉い

恬りやうである。兎角自家自慢のあまり、こんな場合に人を
示したがる。えんがる（珍）者を因んでもいまいましく思ふが、一面因
又もえん品を因として示すといふ陋態を免かれない。陋
多此類のものが少くないのである。各所の高家や旅館などが
その土地の自慢の風景に指定されることを利用するのは品
がよいが、自分の店先や坐敷通りなどを固定するのは
宣伝が飽りて露骨で不申である。同じ高家でも桜本
巻本屋書物を形どつたはがきに、日日次のあるべきも
面白一詩を探し、新歳開心筑、温陰無寒過、聖賢
賞謝我、扶得汗牛書」と云て堂々共感を次感
してゐるのは露骨なあるが却て痛快味を覚く
る。

○毎年除夜に到つて感することもあるが、こゝろも無事に暮
れて来た一年を迎へることが出来るのかと自祝の念がおのづ
こゝろ湧く、六十年を迎へて後別して此感がある。兎角年
生無拘着で生きたい為の養生などを特に力めてゐるから、
ろ行きたくの任かしも長のから一年活動の時なる
と此感が起るとも云へる。自分は養生のびである。生来ろく
酒の量も増した、深夜に酒を飲むこともある、日中飲むこと
もある。去かしえんの為めに敢て健康を害したこともある。
必充集楽を慎過てあるから、えんが何寄りも身体健
康さへのびあらう。八九年前郵船の注射を用ひ四
回傷けてみるが、寄つて感冒に罹つたことがない。医者が
家に来ても、自分は絶対の医薬を交渉がえんへ。えんくの

友人に血痰の検査をやつて貰つた、種々の方法を講ずるやつたりしたことが流行まつが、自分の見を絶対にやらぬ。貴に血痰を検したる悪微候が見えぬが氣のもつて自分から病を作る、医者も他原診断をして貰つた方が病名を受けねば気を安らかにすると心がける。

醫戒を受けねば気を安らかにすると心がける。

医者は心臓家であるの気質既に自分あまり正直で臓腑に心配するかいることを通けていつて長る負人い。寿命絶まむ心注るかいることを通けてゐる。気を付けて寿命の法則と故事つけてゐる。

世の所謂る攝生家から見たら、古稀を過てから如斯ハ氣暴な危険だと云ふ知人が、事実斯のごとくして七十二歳を過つた、七十三歳を迎へた。

そしの陰起と二年前端の法則が異る例のごとく快

榛原製

復をやつて寢ると就かんとするとき毒に後ろを下血のあることが氣付かれた。自分ではあまり無意識で、何人と考へても自分に病氣らしい所がなく氣分とても毫末変つた所がないへ。併し人慈宮のやうに下血で忍ちなる休した例もあるからと家族の云ふので、いつも注射を施す医者を元田に招いて診断を仰ぐと、大腸の病を強く指に押せば押せば微痛を感ずる。血流を濁りかるへから、クワイコウ立腸から出たものなれ(ば)ないと云ふ、便を検査した所の血が混してゐるのを見ても、そう断じれば、さーなる病ひが手當と為すると云ふ、血を留めるを為めの二本の注射を施ーて呉れたさあ困つたことなる、医者がやつのきしへ。

酒を禁ぜんといわば論外出を禁ぜん、人も物も魚も鶏も牛
乳までも嘗分避けよと云いたれと見ると、気を犯す譯なも
行かぬが、正月の元日から、然し病氣心地もしないのに、
飲会などは重患者に勧める扱ひのごとくで、例年
のごとく無理にも行かねばと思つてゐたが、まも叶はも
ないのか、散歩すら出来かねい体で、七十三翁の起頭
は実に前の事である。或は天が警戒を諷刺したのかとも
思つて又るが、病氣うしくなるのに病人とうつてゐること
はうつうつ堪へ難い。日々の地位な軽庭い五六のを経
たらば、まもこの禁を解かるらうと思つてゐるが、
うつく無聊ひ一日を過ごすことが容易でない。日課と
して校閲しなければならぬ大隈侯に関する草稿

樣原製

もあるが、それを続んだり、犯法などを続んで時間潰
しをしたりして、慢を覚ることが出来
しいのであるが、夜は酒力で立ちて寝睡るのが例が
あるが、酒を禁ぜられて寝後も寝ても時を長さ
が眠眠をいろいろ、えんも赤黄黄病ひがある。年休を黄
病ひもあるものの無ひものが、病状の経事とても読書三昧
は宴会を無べきものなら、病人らしからざる負分として
平生の習慣を変ずることが並大体の不快ひもの。
一日でも二日ひも変の習慣を変ずることは容易でない
るが、去かし病中の如き摂養は難儀ひ
れば、健康のときよりも相違なれば、自分が二十数年前
重患に罹つて、十年間摂養しそれが習慣となつたこ

とがあるの今日まで健康を保持し得たのは恐らく艾灸のためであろうと思ふが、今後もこれを極力継続して生命の悪習と悪く闘ふ方がよいとも思ふてゐる。併し気を考さしてゐるうち病が[illegible]弱り弱い自分の弱い意思と結制するへ疲ハモット強くなくてハ駄目いやうな気がする。今朝も排便を早く目が覚め、寝ようとしていろ〳〵考へた。此度の金瓶梅酒を一ようか、悪習と云(ハえんそくの)無い方がしようとすると、毎日の無聊を金瓶の考へる程の仕事が無くなハうと思ひ、今更真剣の仕事を始める年でもあるし、亦美人も思ひ出され、尚ほ別に考へても又化、どうせ終生は実行出来ない。唯心ばかりの事で頭を悩ますもあるまい。寧ろ死日を先づ準備をすることを忘れてはならぬ。いろ〳〵日と惑のあるのは北の二日間の自分の偽らざる消息である。二日記

○九日 雨 ○の孤 雨 ○の孤 雨 ○の孤

蕎麦の花

一しこの
花の咲きかゝるとなりけり
よりあ
ぬ
ずつ出て一つけとうる
ほ
ん
生
涯
年
中
家
正
年
沖

米はあつのやうなるものを
紙に包み撮影する
撮影
花一
蕎麦
早く
あ
ま
ぐ
ま
ま
ま

こうしてこんな相談をひらきます
相手のえ事がおそくなる
（ホは二月二日に家にかへる事を知らせた積りである）
昨年は皆水の上の波を踏えて
ゆきはまの去る。今年は手にとり

重ね帳えつれと祝ひて又一つ
唐種の盃取りあぐる今朝
一日早く芝居を見ようと誘ひ合ひ
一月二日
春坪、花見
学生

皇軍の威武により
滿洲、建設時代に入る
顧る！本庄將軍等の苦心

【奉天特派員三日發】

記念すべき一月三日、日本軍の錦州大破によつて東北の天地には輝かしい光明が來た、顧みれば滿洲事變の發端をなした柳條溝爆破事件の起つたのは忘れもしない九月十八日の午後十時だつた、その日はがう〳〵たる世論の中心中村大尉事件について東北軍參謀長荻洲が森岡領事に對し中村大尉一行は關玉衡の第三旅團の正規兵が殺害したのに違ひないと折れて來た問題のその日だつた、さうして柳條溝の爆破の第一報「支那兵に滿鐵が襲撃される、日支いよ〳〵開戰し、形勢は極めて重大」を振ひだしに二晝夜は

不眠

不休、座つたまゝでその第一電より十九日午前七時までの打電數幾くなかれ一百十八通この柳條溝事件に續いて奉天長春の激戰——滿洲事變が起つてから丁度三ヶ月と十六日、即ち百八日過ぎたのだ百八日間といふものは國際聯盟の活潑にあるひは學良別働隊の兩翼沿線襲撃に我軍は文字通りの受難時代でその間國際苦難と本國政府の方針とに重壓を受けてこれを跳ひ拔かうとする本庄關東軍司令官と關東軍幕僚の苦辛は傍の見る目にも余る程であつた、だが關東軍の終始變らざる態度は「世界戰爆」になるかも知れぬとまで重大視された幾多の紛糾を突破して

錦州

を占領してゐたら」とか又「又あの時朝倉が徐慶命令を受けなかつたら」とか錦州の落ちた今日では愚痴の種となつたのだから愉快ぢやないか、戰ひの跡をたどつて見ると柳條溝爆破事件によつて滿洲事件の爆發したのが九月十八日黑龍江の馬占山軍が嫩江の鐵橋を爆破して江橋大興の激戰が起つたのは十一月四、五六日、それに續いてチチハル戰が起つたのは十一月十八日更に最後の錦州陷落が越年後の一月三日だこれ等の戰鬪において戰死者二百三、四十名東軍傷患者をいれた負傷者が一千名近くに上つた、この丸三ヶ月十六日間チチハル占據に手こるまでのロシア及び國際聯盟の決議、錦州落ちまでイギリス、アメリカや國際聯盟の策動、考へただけでもぞつとするやうな難關の連續であつた、このぞつとするや

○微恙のゆえをもつて命をもつて為すことなく、日課をもつて式次第を執行を拔閲してゐる。この原稿は本年四月大隈侯爵の十年祭紀念會に出席せんとするものなれども老躯を冷る一座の紀念祭なるが故に帝室の修史を其つもりの編輯官に、内閣印刷の種々の文獻を多く見出づる住地あるのみ、五里霧中なること種々の文書と徴し大隈侯閲歷中の最も大なる事件つき考証を為し、折々業績をしたいと自分の思つたことがあるが、未年大隈侯後十年を紀念する為の四民敬慕會を催すことゝなつたまつり、折の四侯の為め何

皇軍の威武により
滿洲、建設時代に入る
顧る！本庄將軍等の苦心

【奉天特派員三日發】

記念すべき一月三日、日本軍の鋒州入城によつて東北の天地には確かしい光明が來た、顧みれば滿洲事變の發端をなした柳條溝爆破事件の起つたのは忘れもしない九月十八日の午後十時だつた、その日はからずも世論の中心中村大尉事件について東北軍參謀長榮臻が關東軍に對し中村大尉一行は關玉衡の第三旅團の正規兵が殺害したのに違ひないと折れて來た問題のその日だつた、さうして柳條溝の爆破の第一報「支那兵に南嶺を襲撃され、日支いよ〳〵開戰」

不眠

不休、座つたまゝでその第一報より十九日午前十時までの打電數多くなれ一百十八通この柳條溝事件に關して奉天長春の激戰――滿洲事變が起つてから丁度三ケ月と十六日、即ち百八日過ぎたのだ百八日間といふものは關東軍の活躍にあるひは華民別働隊の滿鐵沿線襲撃に我軍は文字通りの受身時代でその間國際吉凶と本國政府の方針とに重壓を受けてこれを跳ひ拔かうとする本庄關東軍司令官と關東軍幕僚の苦辛は

し、形勢は極めて重大」を振ひ出し、二晝夜は

傍の見る目にも余る程であつた、だが關東軍の終始變らざる態度は「世界戰爭になるかも知れぬ」まで重大視された幾多の難關を突破してとう〳〵初志を貫いたのだ、關東軍幕僚がいつてゐるやうに「九月十八日直後日本軍が一擧にチチハルと

錦州

を占據してゐたら」とか又「又あの時朝鮮軍が待機命令を受けなかつたから」とか錦州の落ちた今日では憂禍の種となつたのだから愉快ぢやないか、戰ひの跡をたどつて見ると柳條溝爆破事件によつて滿洲事件の發端したのが九月十八日黑龍江の馬占山軍が嫩江の鐵橋を爆破して江橋大興の激戰が起つたのは十一月四、五六日、それに續いてチチハル戰が起つたのは十一月十八日更に最後の錦州陷落が越年後の一月三百だこれ等の戰鬪において戰死者二百三、四十名重傷負傷者をいれた負傷者が一千名近くに上つた、この丸三ケ月十六日間チチハル占據に至るまでのロシア及び國際聯盟の決議、錦州落ちまでイギリス、アメリカや國際聯盟の策動、考へたゞけでもぞつとするやうな難關の連續であつた、このぞつとするやうな難關の連續の聯合には新政權の

確立

も國際關係も患つたより順調に進んだ、即ち奉天省は事變直後張景惠氏を委員長とする地方維持委員會が出來て事變後の治安維持と時局救濟に當り吉林の熙洽氏が吉林省の張作相舊政權を打倒して自ら省主席として獨立を宣言する、續いて遼南の張海鵬、ハルビンの張景惠、北山城子の于芷山が同じく獨立を宣言して何れも張學良舊政權並に南京政府との關係を斷絶して

完全

に獨立せんとしてをるそれに難物だつたチチハル占據によつて黑龍江が走り次で錦州問題の解決によつて奉天、吉林、黑龍江三省の新政權が確立した一方問題となつてゐた蒙古と熱河省も又近くいよ〳〵獨立を宣言することとなつた、かくて奉天、吉林、黑龍江、熱河等東北四省は華民舊政權並に南京政府より完全に獨立するとともにこの各省の獨立完成と共に事變以來東北各省を實力派の

間にうつ然として台頭してゐた新滿蒙に自由國の建設は急轉直下實施されんとする形勢となり吉林黑龍江奉天三省の代表者は既に奉天に集合して目下中にこれに關する軍要協議を續けてゐる、この滿蒙自由國

建設

こそは新滿蒙の欲する自由と、日支滿蒙關係の根本的打開との二つの意味から多大の注目を集めてゐるがこの新滿洲自由國の建設と共に我生命線確保の絶對條件として重大視されてゐるのは滿洲總督制實施說、滿蒙改革必要論等によつて代表されてゐる、日本側の在滿各機關の統一問題並に日支新滿蒙關係の根底をなすべき日滿經濟關係の確立をどうするかといふ點であるが、滿洲自由國の建設はいつ如何にして如何なる形態の下に組織せられ又日本側機關の統一、日滿經濟關係の確立は如何なる輕重を有するか錦州事變による軍事行動の一段落と共に內外の耳目はこれ等新滿蒙問題の一點に注がれるに至つた

○微恙のゆえ、えの巻と拙筆を命やすんじ為すこと能はず、日課として武治の執筆を校閲してゐる。この原稿は本年四月大隈侯爵の十年祭記念會に出席せんとするものであるが、老躯を浴する一種の紀念出版である。滿洲事變は帝國の修史に其つもある編輯官で、此流切迫の種々の文献を多く見る得る位地にあるので、西園寺公と種々の文書と徴し、大隈侯閲歷中の最も大なる事件つき考慮を志し、折々筆録し、とのがあるべし、折の觸れて、筆を出版しないと自分の責任に関つたことがあるので、来年大隈侯没後十年を紀念する為の出版を俗すことゝなつたるつき、今折々四民敬慕会を俗すこと、なるつき、今折々四侯の為め何

が出版されたとしても、今ならば編纂を公にすることあれば別
庭間を会いず、寧ろ海道の折角書きつてある
を活して間を会いすの一案と、こゝの点を採用
することなしに。
北書いまゝ書者も定まらぬ。大隈家より出たる書簡
大隈侯とでも云ふべきこゝなれば、大隈家より出たる書簡
らの文書を始めとして、毛侯の交渉ある維新の
功臣三条公及大久保木戸等を始め其他の傳記
や書簡として毛侯のみに関するものの若くは毛侯の
業つに此事件に関するものを依り、毛侯の働き振りや
毛侯と密なる毅蒼寝貶や、薩長の間を仲
ての毛侯の態度や、元勲功臣と毛侯がどう関柄

複原製

でありたるか、其人が如何なる変化したかをも仔細に考へ
考証と共に史論を試み、毛侯が如何なる多難の風波
を経て維新の鴻業を翼賛したかを、事実に就て
明白なしたいと云ふが北書の目的である。
大隈毛侯八十五年史は洗練する三冊として既に出
版され流布してゐる。侯の事蹟は既に記載され
感さんを与へられる見へるが、普通傳記の体は主人
公を尊らびあつて、○主人公を続る周囲を略叙す
ることが例となつてゐる。其人を敵手があつても著は
敵手を評かれすぎて辰らず、提携者がある場合
公を指す筆は主人公と偏するの傾きがあ
ることを免れぬ。其人の角何人の傳ひも公平を缺

いろ〳〵述べさせる時間がないものだから、まづ何故こうと云ふ
ことを、皆の筆の筆が疎であるからこゝに起因する。例へば
常の雑問に重しとなすとも、其雑問を委しく描かば
其人の性格を実理し其苦心も瞭然とする。先前大体概
の人の傾向、その人を就ての統論（どの事件も書くこと
が通例となりてあるが、実に敵手のサンくを論ずるものも
ある。悪罵まで現はさざれば公平でない。自悪罵はも
ちろんもとより不富だと人を含蓄もしむる筆を
採ふのも無ければ、読者の動もすれば筆の偏傾に惑ふ
ことである。大隈先生の如く或る時代に誤解を受
けた人はきっと敵人と満腹の時敵であることもある。其
人は実際の相違であるが、併しその実を書くこと

横原製

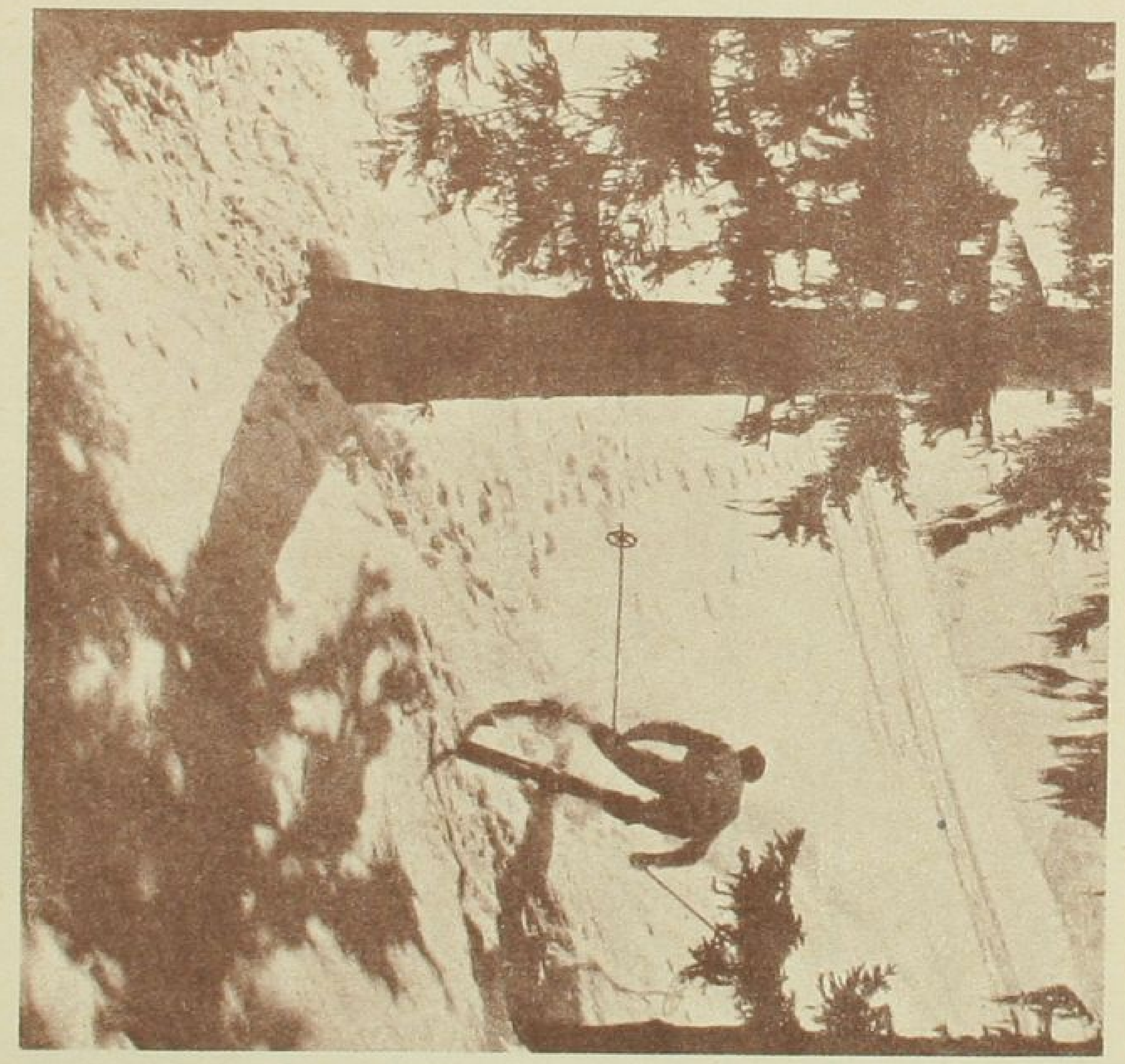
は強弱の力を入れなくてもこれが、それをするには法家の文献
を採ること、これが尤も大切である。法家もし大隈の
ようにきれいな文書のみを大切にするこれ相違なきが、法家
が大隈以外の法家と宮崎とを比べるとき、法家
は宜敷が公からうへいことが甚だきいのである。此等
の内容は大隈を比較するのもあり、弁護するのもあつ
て、其を議合して初めて公平の政策が出来るのも
ある。此書が各方面の文献を以て公平なるのも
公平の政策を得んが為めである。
大隈侯は十五年史の編纂に三年餘も費し、自分は
政治の任に当て、自分共に経験がある。今日のも
の出版する自分が責任があるので、一下面で法家は

ようなが実は仕事とそうして氣が進まないで、打棄て置いたのが、幕末頃と外出が出来るようになって、漸々ぬけもとれると、あまの而もく既に六番目を漢破しても、文章まもなくの幕末に入れば、漢人に不い侯と先輩との関係である。乃ち三條と長、岩倉と侯、大久保と長、木戸と侯、島津久光と侯、黒田と長、などといつも、漢人に意の感するのは、初めて交情の温かいあつたものが、忽ち離散するように、初めて大犬猿言語するものが、俄に提携しようとして、親而霞雨の觀があるが、それまい時相角の現面があつたと考へて偶然にうまく、権医の溜病、藩閥軋轢、守舊進歩の闘争などがその原因をなしたのである。

のに、大隈長は八十五年史に入るまで筆を延べるのいから、漢人に甚だ新し味を覚える。大隈長は急進主義者であるから反對を受け、陸奥も長らくも引き立て或は共同に反對を受けて、幾人と或る時代は強敵の間を長つたが、それでも常に安泰を保つて、大切な問題を料理した。内閣は排撃者が先もあるのに、尚ほ安泰を長つたのは不思議のようであるが、よくよく研究してみれば、蓋し長の何のかに見る知友と、藩閥の公平な人は多くの場合支持者であつたが、然し長は困難を当る時別の技能が無つたから、支持者がある時別の技能が無つたから、外交状

文藝春秋 付録

スキー場 (樺太)大泊、豊原町、落合。(北海道)青山温泉、小樽、札幌、旭川、夕張。(信越線)飯山、新潟温泉、妙高温泉、赤倉温泉、關温泉、燕温泉、高田市。(磐越線)沼尻、中ノ澤温泉、押立温泉。(奥羽線)五色温泉、米澤山、大沼温泉。(陸羽線)鳴子温泉、乙女峠。(上越南線)水上温泉。(北陸線)黒部峡谷スキー場、金澤市外大乗寺山、醫王山。(山陰線)天ノ橋立、世屋村、扇ノ山、大江山、伯耆大山、三瓶山。(東海道線)富士山麓、伊吹山、靈仙山。



政の難局に當らるゝ候を措ては他に人の無いのである。其事は今誰のも云ふことであるが、諸家の文献を擴り見るを征権立て得たのは滔々の世の著作に實は不少多い。

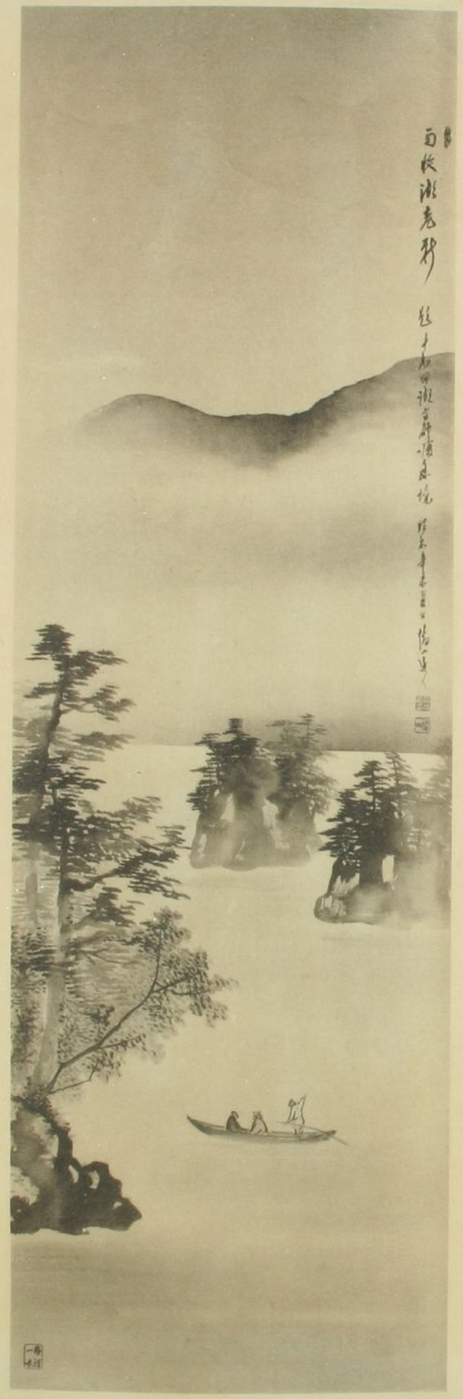
一月四日録

スケート場（北海道）函館市近辺、小樽、札幌、網走湖、旭川。（中央線）宮士山麓諸湖、鳥海湖及其他近辺、松本市近辺、木崎湖、（信越線）諏訪湖、軽井沢、松原湖、野尻湖、（東北線）赤城大沼、日光、山形市付近、盛岡。（奥羽線）秋田市付近

榛原制

以下
メ　丁
白紙

榛原製



閲覧室

榛原製